年報 2022

Vol.15

医療法人財団　華林会

村上華林堂病院

KARINDOH

巻頭言

医療法人財団華林会　村上華林堂病院
理事長　菊池仁志

２０２２年度の村上華林堂病院の年報をお届けさせていただきます。

２０２０年当初より始まった新型コロナウイルスのパンデミックも３年の月日を経てようやく一段落つき、普通の日常生活が戻ってくる兆しがあります。しかしながら２０２２年度は総じて、新型コロナウイルス終息の見通しがつかない１年でありました。閉塞感が続く中、ウクライナでの侵略戦争は激化し、７月には安倍元首相が銃殺されるなど政治的には暗い出来事がありました。しかしながら、スポーツの世界では、大谷翔平選手をはじめ、サッカーワールドカップ、北京五輪での日本人の活躍には勇気づけられました。

２０２２年度には村上華林堂病院はおかげさまで、創立４０周年を迎え、サービス付き高齢者住宅「かりん」も１０周年を迎えることができました。医療に関しては、２０２１年度同様、新型コロナウイルス対策に追われる１年間でありました。発熱外来、新型コロナウイルス対応病床による診療、クラスター対策、ワクチン接種など新型コロナウイルスを中心として医療が回っていました。そのような中でも可能な限りこれまで通りの通常の診療を続けてこられたことは、病院スタッフの力であると共に患者さん、ご家族様、地域の皆さまの協力のおかげであると思います。心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルスのパンデミックは、世の中を大きく変えてしまいました。人と接触することがまるで悪であるかの如く非接触が推奨され、オンラインワークが推奨され、医療の世界でもオンライン診療などこれまで進まなかったことも深い議論もないままに積極的に導入されてきた感があります。さらにマイナンバーカードによる保険証、電子処方箋など医療のデジタル化に関しては、今後さらに進んでいくと考えられますが、しっかりとした検証がなされる必要があると思います。さらにこれからの問題として、「感染症対策」や「医療のデジタル化」はもとより「かかりつけ機能」や「医働き方改革」など、病院として取り組まなければならない問題が山積しております。

新型コロナウイルス感染症の終息にはまだ時間がかかるかと思いますが、地域の医療・介護提供体制の維持、発展に職員一同これからも努力してまいたいと思います。今後とも引き続きよろしくお願い申し上げます。

目　次

巻頭言 2
病院長挨拶 5
病院概要 .....
- 概要と沿革
- 組織図

統計資料 .....
- 外来患者数　入院患者数
  紹介患者数

診療科案内 8
- 総合診療科内科 8
- 血液・腫瘍内科 9
- 脳神経内科 10
- 循環器内科 12
- 緩和ケア科 15
- 呼吸器内科 17
- 消化器内科 19
- 整形外科 21
- 在宅診療部　在宅診療科 22
- 健康増進・糖尿病センター 24
- 腎臓内科・血液浄化療法センター 25
- 眼科・アイセンター 28
- 健康管理センター 30

医療技術部 31
- 薬剤科 31
- 臨床工学科 32
- 臨床検査科 34
- 栄養管理科 35
- リハビリテーション科 36
- 放射線科 39

看護部 40
- 看護部 40
- ２階北病棟 42
- ２階南病棟 43
- ３階病棟 44
- 新４階病棟 45
- 緩和ケア病棟 47
- 中央材料室・手術室 48
- 外来 50

在宅療養部 …… 51
- 訪問看護ステーション …… 51
- 居宅介護支援事業所 …… 53
- 訪問リハビリテーション …… 55
- 通所リハビリテーション事業所（デイケア） …… 56

事務部 …… 57
- 総務課 …… 57
- 医事課 …… 58
- 地域連携室 …… 59

委員会活動 …… 62
- 医療安全管理委員会 …… 62
- 転倒・転落防止対策委員会 …… 66
- 指差し呼称委員会 …… 67
- 院内感染対策委員会 …… 68
- 院内教育委員会 …… 70
- サービス向上委員会 …… 71
- ＮＳＴ兼栄養管理委員会 …… 72
- 褥瘡対策委員会 …… 73
- 認知症ケアチーム …… 74
- 地域振興委員会 …… 75

サービス付き高齢者向け住宅かりん …… 76
サービス付き高齢者向け住宅かりん
（訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん）

業績 …… 78
・学会・研究発表・講演等 …… 78

TQM 活動 …… 80

病院長挨拶

医療法人財団　華林会
村上華林堂病院

病院長　司城　博志

今年度も年間の病院活動を総合的にまとめた病院年報を発刊することができました。2019 年度より、病院年報を病院ホームページ上で随時閲覧していただける形式としています。ホームページの病院情報と整合性を持たせ、総合的な情報伝達力を強化することが目的です。

昨年度に引き続き、今年度も新型コロナ感染症に翻弄された 1 年間でした。
感染が始まった当初は院内クラスターの続発など感染症としても激しいものがありましたが、2022 年度に入ってからはかなり落ち着いた状況になってきました。2022 年度は、新型コロナ感染症対策と通常の医療活動の両立を病院目標に掲げ、早急な医療機能回復、再活性化を目指しました。2023 年 5 月 8 日からは新型コロナ感染症も 2 類相当から 5 類相当になり、本格的なポストコロナの時期の病院運営となってゆくと思います。

新型コロナ感染症は地域における当院の役割について改めて考え直す機会を与えてくれました。地域における当院の役割の根幹は、近隣の医療・介護・福祉施設と連携し、地域の高齢者が生活圏内で暮らし続けていくことを入院設備のある病院として総合的に支援することです（地域包括ケアシステムを支える病院）。

地域における当院の役割を全職員で共有し、これからも地域の方々と共に歩んでいく病院、安心感を提供できる病院、患者さんとご家族、近隣の医療・介護・福祉施設の方々が気持ちよく利用できる病院を目指してゆきたいと思います。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

私事ですが、22 年あまり務めさせてもらった村上華林堂病院の病院長職を無事全うし、2023 年 4 月からは名誉院長職を任じられることになりました。22 年余りの病院長職を大過なく務めることができ、改めて地域の皆様型、村上華林堂病院職員の皆様方のご指導、ご協力に深謝致します。これからは、菊池仁志理事長、山田　猛病院長を支え、一医師として地域医療の充実、村上華林堂病院の発展に微力ながら寄与できればと思っています。

新病院長挨拶

医療法人財団　華林会
村上華林堂病院

病院長　山田　猛

2022年度の病院年報をお届けいたします。
2023年4月1日より病院長に就任いたしました。司城博志前院長は名誉院長として、今後も当院の診療に携わっていただきます。司城前院長は22年余りにわたり病院長として当院の発展に多大な貢献をされました。職員一同を代表して感謝申し上げます。

当院は1982年の開設から2022年に40周年を迎えることができ、7月2日に祝賀行事を行いました。記念式典で祝辞をいただきました竹嶋先生、特別講演を賜りました田中伸一様、誠に有難うございました。障害のある子どもの育成を通じて、家族も学び成長していく姿に感銘を受けました。引き続き病院駐車場にて記念祭を開き、地域の皆様と共に楽しく祝うことができました。ご参加いただきました地域の皆様ならびに運営スタッフの皆様、有難うございました。

また、華林会の所属施設でありますサービス付き高齢者向け住宅「かりん」が開設10周年を迎え、11月5日10周年の祝賀行事を行いました。2023年4月1日より、施設長が野田江美子から坪山由香に交代いたしました。引き続き、終の棲家として入居者に寄り添ってまいります。

新型コロナウイルス(COVID-19)につきましては、日本全体で繰り返しアウトブレイク(爆発的感染拡大)が起こりました。当院でも病棟で感染クラスターが発生し、通常診療に支障をきたした時期がありましたが、幸い病棟単位で終息し診療を継続できました。3年間の経過で社会生活が徐々に落ち着きを取り戻し、祝賀行事などが開催できるようになり、喜ばしいことです。2023年5月8日からは感染症法上の取り扱いが5類相当となり、多くの制限が撤廃されたことも、社会生活の回復を後押ししてくれるものと思います。ただし、私共医療機関では、今後も感染対策には注意をはらってまいります。

2022年9月27～28日、日本医療機能評価機構による病院機能評価を受け、一般病院1と緩和ケアで承認を受けました。病院についてはA評価71項目とB評価17項目でした。緩和ケアについては23全項目がA評価でした。残念ながら秀でているというS評価は得られませんでした。今回の審査合格で終わりではなく、さらに質の高い病院となるよう職員が一丸となって、不備を指摘された項目の改善に取り組みます。

2023年3月より当院のホームページが新しくなりました。広報活動の一環として、当院について分かりやすく紹介していますが、皆様のご感想・ご意見をお寄せいただければ幸甚に存じます。当院の診療の特色として、患者さん全体を診る総合診療と専門内科(脳、循環器、糖尿病、消化器、腎臓、血液、呼吸器)、整形外科、眼科の診療を行っています。診療以外の様々な活動による地域への貢献もしています。2022年度は地域の介護事業所と連携して、高齢者のフレイルについて学びました。高齢者が元気に過ご

せるよう支援します。2023年度も介護と医療の連携の集いとして継続していきます。

今後も当院は地域のかかりつけ病院として、地域社会に貢献してまいりますので、皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

総合診療科内科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

総合診療科内科部長　　柴田　隆夫　（総合内科専門医、病院総合診療学会認定医）

総合診療科内科は、2022 年度　18 名の常勤医師・9 名の非常勤医師で診療を行っており、新患総合外来、各専門外来、検査、入院治療を行っております。当院の特徴としては、地域に根差した診療を主体として、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、血液内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科の主要専門医がそろい、様々な疾患の患者様に対応させていただいております。　末期腎不全や悪性腫瘍の患者さんも増えてきております。コロナ感染症にて一般診療が影響を受けていましたが発熱、上気道症状患者に対する検査、診療体制を充実させ動線を分離し内科診療への影響を最小限にくいとめましたがそれでも患者さんの診療に影響がでました。本年度はコロナ専用に 4 病床を確保し入院が必要な患者さんの治療を行いました。従来の専門性縦割りの内科から全人的医療を行うべく総合診療科内科を基本として診療し地域における当院の役割を果たし、近隣医療機関や施設、地域の皆さんとの連携を大切にして、より良い医療を提供するべく努力していく所存です。

（柴田 隆夫）

2. 臨床実績

2022 年度　　主な内科疾患入院患者（延べ人数）	
症例別入院患者数	総計 1414 名
循環器内科疾患	159 名
消化器内科疾患	122 名
神経内科疾患	465 名
呼吸器内科疾患	137 名
血液内科疾患	93 名
悪性新生物疾患	77 名
内分泌・代謝疾患	100 名
腎・泌尿器疾患	55 名
その他	206(うち COVID 19 患者 37)名

血液・腫瘍内科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

血液腫瘍内科部長　　柴田　隆夫

非常勤医師　　高松　泰（福岡大学病院　腫瘍・血液・感染症内科教授）

2. 臨床実績

年間疾患診療　(2022/4/1-2023/3/31)	
血液悪性疾患(136 例)	（うち入院 85 例）
１．　悪性リンパ腫	61(34) 例
２．　多発性骨髄腫	25(20) 例
３．　急性骨髄性白血病	14(13)　例
４．　急性リンパ性白血病	1 (1)　例
５．　成人 T 細胞性白血病/リンパ腫	9 (7)　例
６．　骨髄異形成症候群	20 (10) 例
７．　慢性骨髄性白血病	5 (0)　例
８．　慢性リンパ性白血病	1 (0)　例
９．　原発性マクログロブリン血症	3 (1) 例
血液良性疾患(18 例)	（うち入院 2 例）
１．再生不良性貧血	6 (1)　例
２．特発性血小板減少性紫斑病	9 (0)　例
３．原発性アミロイドーシス	1 (1)　例
４．特発性赤芽球癆	2 (0)　例

3. 1 年間の活動と今後の展望

当院では比較的高齢の血液悪性疾患の方が多く、活動度に支障をきたしていることが多いため、入院して専門的な治療を行いながらリハビリテーションを進めていき、活動性に改善が得られれば外来化学療法に訪問看護、訪問診療などを活用していただき在宅療養までバックアップし、合併症などで治療の必要が生じたときにはいつでも緊急入院していただける態勢を整えています。最近急性骨髄性白血病に新規治療が保険適応となり今年度は初回から化学療法を導入する方がおられます。また難治、再発の血液悪性疾患や固形腫瘍の方では、緩和的化学療法や疼痛コントロールを中心とした緩和医療にも重点をおき、プライマリーケアーも含めてトータルライフケアのできる診療部門を目指して医療スタッフがチームを組んで取り組んでいます。

（柴田 隆夫）

脳神経内科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

理事長	菊池　仁志
脳神経センター長	山田　猛
医　師	谷脇　予志秀
医　師	古田　興之助
医　師	佐藤　真依
医　師	梅谷　啓太
兼任医師（在宅診療部）	田代　博史
その他	非常勤医師

2. 臨床実績

2022 年度　神経系疾患（2022 年 4 月～2023 年 3 月入院患者）	
パーキンソン病（含：分類不能症候群）	232
多系統萎縮症	41
筋萎縮性側索硬化症・原発性側索硬化症	38
進行性核上性麻痺	24
大脳皮質基底核変性症	17
認知症（含：レビー小体型認知症）	34
多発性硬化症・視神経脊髄炎	14
脳血管障害	18
脊髄小脳変性症	26
脊髄・脊椎疾患	7
プリオン病	6
脳症・脳炎	6
頭部外傷	2
筋疾患・重症筋無力症	5
水頭症	1
廃用症候群	4
末梢神経疾患	1
てんかん	3
感染症	15
その他	11
計	505

3. 1 年間の活動と今後の展望

当院の脳神経内科は、外来・入院ともパーキンソン病、パーキンソン症候群、筋萎縮性側索硬化症などの神経難病を主に診療しています。大学病院や総合病院からの紹介が多く、神経疾患の分野で地域医療に貢献しています。

入院診療実績は、障害者施設等一般病棟での神経変性疾患患者が 7 割を超えています。疾患構成は従来通りで、パーキンソン病およびパーキンソン症候群が多いです。入院での集中的なリハビリテーションによる機能維持、定期的なレスパイト入院による在宅療養の支援を行っています。肺炎、尿路感染症などの合併症治療、転倒による骨折の保存的治療や他院での手術治療後のリハビリテーションにも対応しています。2 階北病棟と 4 階病棟の入れ替えにより障害者施設等一般病棟の病床数が 30 床から 34 床に増え、神経難病患者を受け入れやすくなっています。胃瘻栄養や人工呼吸器を希望されない筋萎縮性側索硬化症患者さんで、在宅療養や介護施設で対応困難な場合には、当院での看取りも対応していきたいと考えています。

リハビリテーション室とスタッフは充実しており、特にパーキンソン病に特化した LSVT (Lee Silverman Voice Treatment)は患者から高評価を得ています。少数ではありますが、神経変性疾患の患者で経鼻胃管から経口摂取に移行できた例もあります。進行性の神経難病では期限はありませんので、長期の通院リハビリテーションが提供できています。

当院では、大学病院や急性期病院では経験できない慢性期や進行期の神経難病の療養について学ぶことができます。

神経難病の治験(筋萎縮性側索硬化症を対象としたエダラボンの内服)やケアの向上に役立つ臨床研究は進めていきたいと考えています。脳神経内科専門医療機関の少ない福岡市西部～糸島地区において、当院は脳神経内科の地域医療を近隣の医療機関とともに支えていきます。

（山田 猛）

循環器内科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）　敬称略

副院長・循環器内科部長　　星野　史博

非常勤医師　　田代　浩平　（福岡大学病院　循環器内科）

非常勤医師　　有村　忠聴　（福岡大学病院　循環器内科）

非常勤医師　　桑野　孝志　（福岡大学病院　循環器内科）

非常勤医師　　清水　真行　（福岡大学病院　心臓血管外科）

非常勤医師　　和田　秀一　（福岡大学病院　心臓血管外科教授）

2. 臨床実績

循環器専門医研修関連施設および高血圧学会認定研修施設を維持し，循環器専門医 2 名とその他に非常勤の循環器内科専門医 3 名（福岡大学病院）、心臓血管外科医 2 名（福岡大学病院）の体制で外来診療および病棟業務を継続した。心臓リハビリテーション（以下、心リハ）は、平成 25 年 1 月から心大血管疾患リハビリテーション科 I(心 I)の施設基準を維持している。

Key Word；治療抵抗性心不全、心不全ステージ分類、心不全パンデミック

外来：

患者数は総数 6995（前年 6406 名）（月の平均：582 名（前年 533）名、非常勤医師を含む）であり covid19 感染禍であったが前年より増患し、循環器常勤医師の増員が大きく影響したと考えられた（表 1)。心リハ対象者は 20～30 名/月程度を確保でき、非常勤医師（福大循環器内科および心臓血管外科）を中心に紹介患者数が確保でき稼働の維持が出来た。引き続き感染対策に病院をあげて一層の努力を行いつつ、地域支援病院として今後も更なる増患に対応できるよう取り組む。

入院：

循環器疾患のみの入院数は、159 名（前年 134 名）と増加し、これには常勤および非常勤医師の増員や近隣医療施設からの紹介が増えたことが主な要因と考えられた。内訳として高齢者の心不全（HFpEF）再発症例や心臓血管外科術後もしくは急性期治療後の心リハ対象者（特に維持血液透析患者）が圧倒的に多く、心不全の基礎疾患としては心房細動などの不整脈や左室拡張障害、弁膜症、慢性腎不全の増悪に伴うものが多くを占めた（表 2)。

入院加療を必要とした心不全症例は 81 名（前年 50 名）と増加し、その中でも入院退院を繰り返す心不全ステージ C に該当する高齢者の心不全患者が明らかに増加した。その背景には、covid19 感染を警戒した患者が自宅での生活や受診控えとなりフレイルに移行する、適切なタイミングでの受診が出来なくなった、他者とのコミュニケーションが減り抑うつ状態に至る、などの特殊な生活環境下にあった影響が大きいと拝察される。外来での心リハも covid19 感染禍の対策にて縮小せざるを得ず，①EBM の示す通り患者の体力向上やうつなどの精神面でのサポートができずに悪循環となったこと，　②今まで可能であった 1～2 回/週の心リハが出来ずに問題のある症例において細やかな投薬調整や栄養・服薬指導などの患者教育が定期的に行うことができず早期の心不全治療介入が出来なかったこと、などが挙げられる。

尚、入院および外来の心リハ対象者は、入院 93 名（前年 91 名/年）、外来 203 名（前年 230 名/年）と減少（表 3）しており昨年の covid19 感染禍での受診控えや入院の心リハ制限など特殊な状況を引き継ぐ結果であった。転院での受け入れ症例は、特に心不全ステージ D に該当する緩和ケアを見据えた治療抵抗性心不全患者の転院（福岡大学病院ハートセンターや福岡記念病院、九州医療センター心臓血管外科など）が増加した。自宅退院が困難な症例に際し、当院の大きな特徴である在宅診療および訪問看護への移行や近隣の療養型病床への転院、当院関連の施設であるサービス高齢者住宅“かりん”への入所など当院地域連携室を介した流れも covid19 感染禍で大きな制限があり苦慮する症例も多々認めた。

検査：

循環器医師の増加により昨年より明らかに増加しており（表 4）、検査技師の技術向上に裏付けられた質の向上は継続できており今後も安定した実績を堅持する体制が出来ている。

手術：

ペースメーカー移植術（PMI）の対象となる症例（電池交換術を含む）は 33 件（前年 34 件）と症例数に変わりはなかった（表 5）。当科ではクリーンルーム下での PMI 施行であり術後感染などの合併症は殆どなく、今後も積極的にデバイス治療に取り組む所存である。

表１　2022 年度　循環器科外来延べ患者数

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	**合計**	**平均**
587	558	594	598	651	586	566	538	618	534	560	605	**6995**	**582.92**

表２　2022 年度　循環器系疾患退院　延べ患者数

心不全	81
ペースメーカー電池消耗	16
狭心症	10
心房細動	8
大動脈瘤及び解離	8
高血圧症	6
洞不全症候群	4
房室ブロック	3
大動脈弁狭窄症及び閉鎖不全症	3
その他	20
総　数	159 名

※該当者数が 3 名以上の病名を挙げています
※2 名以下の病名は［その他］に入れています

表３　2022 年度　心大血管算定患者数（件数）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
外来	16	18	20	23	19	18	16	15	15	16	16	15
入院	10	10	10	5	6	6	8	10	7	5	7	9

表４　2022 年度　検査件数

心エコー	773 件
ＡＢＰＭ	12 件
ＣＡＶＩ	296 件
経食道エコー	2 件
運動負荷心電図	8 件
ホルター心電図	156 件
中心血圧	128 件

表５　2022 年度　ペースメーカー手術件数

ペースメーカー移植術	20 例
ペースメーカー交換術	13 例
体外ペースメーキング	1 例

3. １年間の活動と今後の展望

昨年と同様に covid19 感染拡大に伴い、外来や入院での通常診療や転院調整において制限があり患者さまや近隣医療機関の皆様には大変な迷惑をかけた１年であった。

福岡大学病院からの非常勤医師（循環器内科、心臓血管外科）派遣にて専門外来は維持でき、来年度は更に循環器専門医１名が入職する予定（計 ３名）があり、福岡大学病院などの高次医療機関との密なる連携，近隣の療養型病床を有する医療機関や施設などとのスムースな連携を確立できるシステム構築を万進する。さらには、近隣のかかりつけ医と連携しステージ B の患者を早期に抽出する、心リハや適切な薬物治療、多職種の早期介入などに取り組みステージ B から C への移行を抑えて心不全パンデミック対策に取り組むことが急務と考える。

（星野　史博）

緩和ケア科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

緩和ケア科部長、病棟医長	司城　博志
医　師	柴田　隆夫
医　師	工並　直子

2. 臨床実績

昨年１年間の「緩和ケア病棟」の入院数は 233 名（男性 130 名、女性 103 名）、入院時の年齢は 35 歳から 101 歳で平均年齢は 76.8 歳でした。悪性腫瘍の種類は例年とほぼ同じく、肺癌、胃癌、膵癌などが主でした（表１）。患者さんの地区別の入院状況でも例年と同様、福岡市西区、早良区、糸島市で全体の 91.4%を占めていました。これは 2012 年の 77%に比べて増加しており、「緩和ケア病棟」が患者さんやご家族の生活基盤がある地域に密着した施設であることを示しています。（表２）。「緩和ケア外来」には、昨年度 125 名の患者さんを紹介していただきました。昨年度の緩和ケア病棟在宅復帰率は 16.6%でした

表 1：ホスピス・緩和ケア病棟の入院患者の原疾患別分類

肺癌	61 例
食道・胃癌	14 例
大腸・直腸・肛門癌	30 例
肝・胆・膵癌	55 例
乳癌	9 例
その他（子宮癌、卵巣癌、頭頸部癌）	64 例

表 2：　ホスピス・緩和ケア病棟の地域別入院状況

福岡市西区	49.8%
福岡市早良区	38.6%
糸島地区	3.0%
その他の福岡市	5.2%
その他	3.4%

3. １年間の活動と今後の展望

昨年度に続き、今年度も新型コロナ感染症が緩和ケア病棟の運営に大きな影響を与えた１年でした。感染防御の観点から、家族の面会、付き添い、患者さんの外出・外泊の制限を余儀なくされました。残り時間が限られた患者さんとその家族にとって、家族として日常の時間を普通に過ごすことが、かけがえのない大切なものであることを実感しました。コロナ感染も３年目に入り、できる限り面会制限を緩和し、家族と過ごしていただけるように配慮を心がけました。

病気が治らない困難な状況を生きている患者さんは、治らないということは仕方のないことだが、最期の時を迎えるときまで、毎日を安心して生きてゆきたい、自分なりに納得して、自分

ができる最善を生きてゆきたいと真摯に希望されていると思います。
訪問看護、訪問診療と緩和ケア病棟のスムーズな協力・補完体制が、華林堂病院が提供する緩和ケア医療の最大の特徴だと考えます。今後も患者さんとご家族、近隣の医療機関の皆様方のご要望にしっかり応えられるように努力してゆきたいと思います。

（司城 博志）

呼吸器内科

1. スタッフ紹介（2022 年 3 月 31 日現在）

呼吸器内科部長　　有冨　貴道

非常勤医師　　串間　尚子（福岡大学筑紫病院　呼吸器内科）

2. 2022 年度呼吸器疾患（入院・外来）

疾患名	外来	入院
かぜ症候群		**1 例**
かぜ（感冒）	325	0
上気道炎	419	1
インフルエンザ	59	0
感染性疾患		**203 例**
肺結核症（陳旧性を含む）	60	1
肺炎		
細菌性・肺化膿性	48	19
（マイコプラズマを含む）	1	0
非細菌性	287	183
（誤嚥性を含む）	78	131
閉塞性肺疾患		**29 例**
気管支喘息	633	5
慢性閉塞性肺疾患（COPD）	150	17
慢性気管支炎（非閉塞性）	347	7
拡張、嚢胞性肺疾患		**3 例**
気管支拡張症	69	2
無気肺・嚢胞など	33	1
腫瘍性肺疾患		**34 例**
肺がん（原発性・転移性）	161	34
縦隔腫瘍	5	0

疾患名	外来	入院
肺線維化疾患		**11 例**
間質性肺炎	72	11
サルコイドーシス	6	0
胸膜疾患		**17 例**
胸膜炎		
結核性胸膜炎	0	0
癌性胸膜炎	7	2
胸水	97	8
膿胸	2	3
自発性気胸	19	4
肺循環障害		**1 例**
肺水腫	2	1
換気異常		**18 例**
睡眠時無呼吸症候群	98	18
睡眠時呼吸障害	0	0
過換気症候群	8	0

合計	317 例

3. 1 年間の活動と今後の展望

【診療科案内】

呼吸器内科の専門外来診療は月、火、水曜日の午前中、更に木曜日、金曜日午後に有冨が担当（土曜日も第１，第３午前中）、また福岡大学病院から串間尚子先生にて木曜日午前中に呼吸器疾患に関して専門に診断治療を行っています。また睡眠時無呼吸症候群については診断と治療特に CPAP（シーパップ：持続陽圧呼吸療法）導入患者の適応基準のための入院検査や装着患者の日常管理を特に水曜日に行っています。新患も各診療時間に合わせて相談や診療にあたっています。他に職員検診や来院される健康診断の胸部 X 線のチェックを行い健康管理の一部を担っていますし、精密検査もおこなっています。

今年もCOVID-19が2023年初めは猛威を振るっていましたが、減少や軽症化に伴い5類感染症のインフルエンザ並みの扱いになっています。しかし患者数はまだ減ってもいないし今後も続くと思われます。当院でも外来や入院での高齢者入院があり更に注意が必要です。ワクチン接種も将来インフルエンザ並みに流行し予防接種も毎年必要になるでしょう。また今後はコロナ後遺症で胸写異常の精査もありますし、呼吸器症状の継続が問題になっており特に咳嗽に関して治療の方針等が呼吸器疾患の学会でも問題になっていました。その為外来、入院と今後も目が離せない状況ではあります。

2022年度の外来・入院患者数を表でみると、今年度は呼吸器疾患関して2021年度より患者数が若干増加しています。外来にて発熱を主訴にコロナを心配され受診したのが大きな原因と思われます。大抵は上気道炎だったようです。これらに伴い感冒薬といわれる解熱剤や漢方薬が品薄や外来で出せなくなったという現象も起きていました。しかしインフルエンザがやや増えてきている傾向ですが二次感染の肺炎は減っています。今後は検査のコロナ検査有料化に伴い検査を積極的にしないため流行が再び来ることが懸念されます。

呼吸器疾患入院患者数は前年とほとんど変わらないようでした。しかし呼吸器疾患の増悪が多くコンサルトを受ける頻度が多かった印象でした。間質性疾患の急性期は高齢になると救命はむつかしくなり、不幸な転機を取ることもありました。成人呼吸促迫症候群（ARDS）など主治医の力と思いますが、一緒に診させていただき呼吸器疾患の医者としてすこしは援助できました。

【診療方針：方向性と展望】

当院は救急診療というより慢性期疾患の管理を担っています。特に呼吸器疾患はこれらの患者さんには避けて通れない疾患でもあります。肺炎は年齢的にも入院の機会が多い疾患ですし、市中性肺炎はもちろん院内肺炎／医療・介護関連肺炎も増え続けています。依って相談の機会も増えると思われ、適切な治療・助言に携わっていきたいと思います。また従来からの1.慢性閉塞性肺疾患（COPD）と気管支喘息、2.肺癌、3.睡眠時無呼吸症候群(SAS)について外来診療にも力を注いでいきたいと思います。

（有冨　貴道）

消化器内科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

消化器内科部長　　小山　洋一
常勤医師　　司城　博志
　　横山　昌典
非常勤医師　　2 名（福岡大学病院　消化器内科）

2. 臨床実績

2022 年度消化器内科実績	
【肝疾患】	
C 型肝炎に対するインターフェロンフリー療法	約 10 例
B 型肝炎に対する核酸アナログ製剤	約 23 例
【内視鏡】	
上部消化管内視鏡検査	900 例
下部消化管内視鏡検査	252 例
内視鏡的止血術	2 例
内視鏡的大腸ポリープ切除術	29 例
内視鏡的食道静脈瘤結紮術	1 例
内視鏡的胃瘻造設術	9 例
内視鏡的胃物除去	1 例
計	1152 例

3. 1 年間の活動と今後の展望

消化器内科は 2 人の常勤医師と 2 名の非常勤医師で、消化器疾患全般(消化管、肝、胆、膵)の診断・治療に全力をあげて取り組んでいます。

消化管は食道・胃・大腸の癌をＸ線・内視鏡で診断し、ポリープや早期がんは内視鏡的切除を行っています。消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術も施行しています。なお、平成 21 年に受けた日本消化器内視鏡学会関連施設の認定は、以後も継続して更新しております。また最近は、近隣の病院や施設からのご依頼による内視鏡的胃瘻造設術や胃瘻チューブの交換も増加してきています。

肝臓疾患は平成 21 年に肝疾患治療専門医療機関の認定を獲得し、平成 23 年より日本肝臓学会関連施設の認定も受けました。C 型慢性肝炎に対してのインターフェロンフリー療法、Ｂ型肝炎に対するインターフェロン療法や核酸アナログ製剤投与、自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変に対しての免疫療法、原因不明の肝障害に対しての肝生検などを肝臓専門医が行っています。非代償性肝硬変症の難治性腹水に対し、腹水濃縮濾過再静注法(CART)も積極的に行い、患者様の ADL 改善に努めています。肝細胞がんは、腹部超音波検査・CT で診断し、早期肝細胞がんには、ラジオ波焼灼術も施行可能です。食道静脈瘤に対しては、内視鏡的結紮術と硬化療

法を行い、緊急吐血症例にも対応しています。また、現在３名の肝炎コーディネーターにより、肝疾患患者様への積極的な関与と管理を行っています。

胆・膵分野は画像診断で、がんの早期発見、閉塞性黄疸に対する経十二指腸的胆管ドレナージ術、胆管内の結石除去など、近隣の外科病院と連携して治療を行っています。

進行消化器がんで手術治療が不可能な症例も、抗がん剤治療を行い、更に進行した症例では緩和ケア病棟での加療を行い、包括的な医療を提供出来るように努力しています。

（小山 洋一）

整形外科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

整形外科部長　　蒲原　光義
非常勤医師　　福岡大学整形外科教室より複数名

2. 臨床実績

2022 年度　整形外科患者数（延べ数）

	外来治療人数	入院治療人数
4 月	453	5
5 月	368	4
6 月	412	0
7 月	382	0
8 月	343	0
9 月	354	0
10 月	366	0
11 月	361	0
12 月	319	0
1 月	327	0
2 月	293	0
3 月	408	0
合　計	4386	9

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度は、諸事情により 5 月以降の診療を著しく制限し、福岡大学整形外科医局のご助力を得て、主に外来診療に対応いたしました。診療が困難な曜日もあり、ご迷惑をおかけした患者様や近隣介護施設および開業医の先生方にお詫びするとともに、この場を借りて、福岡大学整形外科学教室の山本卓明教授をはじめ、総出でご助力頂いた医局の皆様方に御礼申し上げます。

外来診療は主に近隣にお住まいの方、登録医の先生からのご紹介、他科外来・入院併診・介護施設などからのご紹介となっています。腰痛、膝関節痛等体幹・四肢関節の変性に起因した疾患の患者さんが多く、CT・MRI 検査も比較的早期に施行できて診断の有力なツールとなっています。骨粗鬆症への対応にも力を入れており、ご高齢な方がちょっとした転倒などで骨折しやすい、股関節部や脊椎部の骨密度測定（DEXA 測定）を保健適応で行っています。また、登録医の先生を始めとした地域の医療機関、福岡大学病院等の近隣 3 次病院とも連携して適切な専門的治療を心がけております。

2023 年度より、整形外科副部長として白井佑先生が着任し、当院の整形外科は月曜日から土曜日まで毎日午前中の診療体制を整備いたします。大腿骨頸部骨折などの手術にも対応可能となりますので、転倒等により骨折が疑われる際も先ずは当院へ受診にお越しください。

（蒲原 光義）

在宅診療部　在宅診療科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

在宅診療科部長（2023 年 3 月～）　古田　興之介
在宅療養部長　田代　博史
在宅診療兼任医師　司城　博志
当院併設サ高住「かりん」担当医師　山田　猛 ・ 工並　直子
在宅コーディネーター　3 名（看護師 2 名・在宅介護事務 1 名）

2. 臨床実績

看取りの年次推移

	2020 年度	2021 年度	2022 年度
登録総数	171 名 （男 55 名・女 116 名）	176 名 （男 75 名・女 101 名）	216 名 （男 95 名・女 121 名）
死亡総数	45 名	45 名	81 名
病院死亡	10 名 難病： 3 名 癌　： 3 名 他　： 4 名	11 名 難病： 2 名 癌　： 5 名 他　： 4 名	24 名 難病： 3 名 癌　：13 名 他　： 8 名
在宅死亡	35 名 難病： 8 名 癌　：10 名 他　：17 名	34 名 難病： 2 名 癌　：17 名 他　：15 名	57 名 難病：13 名 癌　：25 名 他　：19 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度の診療科構成は、訪問診療常勤医が 1 名、訪問診療兼任医師が 2 名、サ高住「かりん」担当医 2 名、在宅コーディネーター3 名（看護師 2 名、介護事務 1 名）でした。兼任ではあるものの前年と比較し医師 2 名増員の形で 1 年間稼働することができました。なお 2023 年 3 月より古田医師が在宅診療科部長に就任し、訪問診療常勤医となっています。

2022 年度において 1 年間の患者登録延べ総数は 216 名、その中で死亡総数は 81 名（在宅での看取りが 57 名で 70.4%、病院内での看取りが 24 名で 29.6%）でした。患者の登録延べ総数は前年度より 40 名増加しています。在宅看取り数に関しては、前年度と比較し 13 名の増加となっています。医師の訪問診療体制が 1 名から 3 名へ増員となったことが、登録延べ総数および在宅看取り数増加の大きな要因と考えられました。

在宅での看取り 57 名の中で、高齢者施設での看取りは 27 名（2021 年度は 15 名）でした。その内訳は当院併設のサ高住「かりん」が 14 名（2021 年度は 10 名）、特別養護老人ホーム「マナハウス」が 4 名（2021 年度は 3 名）、「マイネスハウス福重」が 3 名（2021 年度は 0 名）、「PD ハウス有田・ヴィレッジすみれⅡ・有料老人ホーム西の丘・看多機三丁目の花や・コレクティブハウスひまわり・SJR 高取」が各々1 名ずつでした。当科では近隣の高齢者施設での看取りを支援することも重要な役割と考えていますが、前年度と比較し施設での看取り数は 15 名か

ら 27 名への増加となりました。

また当科では定期的に医学部学生の在宅診療実習を受け入れてきましたが、2020 年度および 2021 年度は COVID-19 感染流行に伴い学生の受け入れが行えませんでした。2022 年度は感染流行も落ち着き、九州大学医学部学生 6 名、福岡大学医学部学生 14 名の在宅診療実習を受け入れることができました。2023 年度も引き続き医学部学生の在宅診療実習は受け入れていく予定です。

在宅診療科としての基本的な方針（神経難病や末期癌の緩和ケアなど当院に特化した病院機能を支える・近隣の高齢者施設を支援する）は本年度も変わることなく、病院と連携して行う在宅医療は継続していきたいと考えています。

（田代 博史）

健康増進・糖尿病センター科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

センター長　　吉田 亮子　（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　　小野 順子　（糖尿病学会認定研修指導医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　　柳田 育美　（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会認定内科医）
医　　師　　矢野 沙織　（糖尿病学会認定専門医、日本内科学会認定内科医）

糖尿病療養指導士
20 名　　看護師 12 名、 管理栄養士 2 名、　栄養士 1 名
薬剤師 1 名、　臨床検査技師 3 名、 理学療法士 1 名

2. 臨床実績

外来および入院患者内訳

外来	総数	1647 名	
糖尿病		741 名	
健康増進関連、一般内科		906 名	*1
入院	総数	200 名	
糖尿病		141 名	*2
その他		59 名	*3
入院　（院内他科依頼）	総数	87 名＋α	*4

＊1　高血圧、脂質異常症、動脈硬化性疾患、内分泌疾患
総合外来、救急外来を含む
＊2　糖尿病教育入院教室参加数 47 名
（新型コロナウイルス感染症のため糖尿病教室制限の時期あり）
他疾患で入院した糖尿病患者を含む
＊3　健康増進関連、新患外来から入院した呼吸器、消化器、尿路系の急性期
疾患、障害者病棟や緩和ケア病棟関連の疾患
＊4　入院中の併診で血糖コントロールを行った患者
（α：眼科短期入院中の糖尿病患者）

3.　1 年間の活動と今後の展望

2014 年に当センターが開設し 9 年目にあたります。本年度も福岡大学内分泌・糖尿病内科からの応援を頂き、看護師・栄養士・薬剤師・臨床検査技師・リハビリテーション（理学・作業・言語療法士）事務部と多職種と連携をとりながら診療に携わって参りました。

今年度もコロナウイルス感染症の影響で、面会制限による患者さんやご家族への対面や集団での指導が不十分で、また職員も休まざる得ない状況が頻回にありました。一方で糖尿病の患者さんは年々増加傾向にあり、高齢化もすすんでおり、個別での診療、対応が必要なケースが増えております。診療科や職種を超え、患者さんの情報の把握、知識を共有化し、連携をとりながら寄り添った診療が継続できるよう引き続き努めていきたいと思います。

（吉田 亮子）

腎臓内科・血液浄化療法センター

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

血液浄化療法センター長・腎臓内科部長　　村田　敏晃
看護師長　　1 名
看護師　　8 名
臨床工学技士　　6 名
ケアスタッフ　　1 名

2. 臨床実績

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
外来	1392	3146	3279	4592	5543	6344	6740	7035	6807	6700	6430	6215	6214
入院	197	532	1007	1000	684	793	815	912	1031	1173	1308	1342	1492
延べ人数	1589	3678	4286	5592	6227	7137	7555	7947	7838	7873	7738	7557	7706

図）2010年7月5日から2023年3月31日までの透析患者延べ人数の推移

3. 1 年間の活動

(1) 腎臓内科：

外来での慢性腎臓病（CKD）患者 93 名、ステージ G3 a 以上が 56 名で、G3a:25 名（男性 11、女性 14）、G3b:17 名（男性 7、女性 10）、G4:6 名（男性 1、女性 5）、G5:8 名（男性 5、女性 3）（＊糖尿病・内分泌内科，循環器など他科併診も含む）であった。

(2) 血液浄化療法センター：

当センターでは、安全で質の高い透析療法・看護の提供」に努め、木の素材を生かしたぬくもりがある床と大きな窓のあるフロアで、患者さんの安全で快適な透析療法を提供することを目標としている。透析のシステムとして、逆浸透水処理装置、エンドトキシン捕捉フィルタ、透析溶解装置 DAD などを使用し透析液清浄化を行い、超純粋透析液（エンドトキシン濃度 0.001EU/mL 未満かつ透析液細菌数 0.1cfu/mL 未満）を作製し、配管の繋ぎ目がない PVDF 配管を使用することによって患者さんには非常に清浄化された透析液を供給している。装置は、ブラッドボリューム計が装備されている、多人数用透析装置 6 台と個人用透析装置 22 台を設置し、血液透析（HD）、血液濾過（HF）、限外濾過（ECUM）、血液濾過透析（On-line、IHDF）、AFB への対応が可能。また、必要に応じて血漿交換療法（CART、LDL-A、DFPP、単純血漿交換）なども行っている。体重測定の間違いなどが起こらないように透析通信システム Future Net Ⅱ（日機装社）を使用している。治療に際しては、血液浄化関連専門医（透析専門医・透析指導医・血漿交換専門医資格あり）・透析療法従事職員研修を終了した看護師・臨床工学技士があたり、透析中の急変に備えています。

2023 年 3 月末時点で、スタッフは，師長 1 人・看護師 9 人、臨床工学技士 5 人。

2022 年度、

新規患者は 5 人。内当院での新規導入患者は 4 人（昨年度 4 名）。他院で維持透析中の患者１人が賀茂クリニックより紹介され外来透析となった。

2022 年 3 月末時点で、当院透析患者数は 49 人（昨年度 51）、内 39 人（昨年度 38）は外来透析、10 人（昨年度 13）は入院中あった。

当院外来患者 1 名は他院（西福岡病院）移った。

2022 年度の延べ患者数は 7706 人（昨年度 7557）で、外来 6214 人（昨年度 6215）、入院 1492 人（昨年度 1342）で、2021 年度に比べて外来 1 人減（昨年度 215）、入院患者 150 人増（昨年度 34）で，延べ人数としては 149 人増加（昨年 181 人減少）で、2021 年度より増加に転じた（図）。

入院患者の入院科は同一患者再入院も含め、
腎臓内科 24 人＜昨年 39 人＞（紹介元：当院外来 5、新規導入 3、済生会福岡総合病院３、三光クリニック 3、むらやま泌尿器科クリニック 2、福岡大学病院 5：腎臓・膠原病内科 2；整形外科 2；心臓血管外科１、白十字病院外科 1、西福岡病院１、PS クリニック 1）。
循環器内科 11 人＜昨年 9＞（紹介元：新規導入１、福岡大学循環器内科 5、福岡大学病院整形外科 2、九州医療センター１、福岡記念病院 1、松口胃腸科外科医院 1）。
糖尿病・内分泌内科 8 人＜昨年７人＞（紹介元：当院３，福岡大学病院形成外科 2、松口胃腸科外科医院１、三光クリニック 1、福岡記念病院１）。
神経内科 5 人（紹介元：賀茂クリニック 4、当院１）
眼科 4 人＜昨年 6 人＞（紹介元：信愛クリニック 2、松口胃腸科外科医院 1、はせ川クリニック１）。
消化器内科 1 人＜昨年 2 人＞（紹介元：松口胃腸科外科医院 1）。
ECUM1 人。

2022 年度の死亡患者は 11（昨年９）人。他院よりの紹介患者 4 人、当院外来・入院中を含め患者７人（4 名は院内で、内 2 名は肺癌、大腸癌）、3 名他院へ搬送され死亡。

2022 年度、患者の新型コロナ感染は 8 名：外来患者 4 名、入院中患者 4 名。外来患者 3 名と入院患者 4 名は、当院で空間的時間的隔離透析を施行し治癒。外来患者 1 名は福岡徳洲会病院のコロナ病棟へ入院。入院患者 4 名は何れも院内感染。スタッフ感染は 2 名で、家族より感染。

血漿交換は、腹水濃縮再静注（CART）：延べ 5 回（昨年 14）、同一患者あり。免疫吸着（神経疾患：延べ 17 回＜昨年 10＞）：同一患者で入院加療。

シャント関連：新規作製 12 人（昨年 11）、PTA 11 人（昨年 8）：同一患者あり、であった。

紹介元病院は、福岡大学病院腎臓・膠原病内科・循環器内科・心臓血管外科・形成外科・整形外科、白十字病院、福岡記念病院、九州医療センター、三光クリニック、重松クリニック、信

愛クリニック、松口胃腸科外科クリニック、賀茂クリニック、はせ川クリニック、PS クリニック（順不同）であった。

（村田 敏晃）

眼科・アイセンター

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

副院長・アイセンター長　　野下　純世
部　　長　　ファン　ジェーン
医　　師　　下川　亜沙美
看護師　　２名（外来日は応援あり）
視能訓練士　　３名
眼科クラーク　　１名
医師事務　　１名（外来日は２名）

2. 臨床実績

2022 年度　眼科手術症例内訳

	外来	入院	合計
水晶体再建術（白内障手術）	21	645	666
硝子体手術	0	87	87
網膜復位術	0	2	2
緑内障手術	0	26	26
外眼部手術	30	41	71
硝子体注射（※１）	241	10	251
その他	42	72	114
計			**1,217**

硝子体注射（※１）		外来	入院
	テノン氏嚢内注射	10	1
	硝子体内注射	231	9

3. １年間の活動と今後の展望

【臨床実績と１年間の活動】

2022 年は新型コロナウイルスとの付き合い方も慣れ、コロナ患者が増加した時は入院の制限を行うものの、感染対策に留意しながら、ほぼ通常通りの手術を行いました。手術につきましては、前年と同様、硝子体手術、白内障手術、各種緑内障手術、外眼部の手術（眼瞼下垂、睫毛内反）、翼状片、結膜弛緩症など、多種多様な治療に対応しました。入院前の PCR 検査を行い、患者様にも安全に手術を受けていただけるようにしております。

外来は、火、木（午前、午後）、土（午前）、手術は月、水、金（午前、午後）で行っております。火、木、土の外来は、待ち時間軽減のため予約制で行っており、看護師や視能訓練士、医師事務の配置を手厚くすることで、患者様の待ち時間短縮を図り、患者満足度の向上を目指しております。外来日は、もちろん予約外でも診察は可能なのですが、予約の患者様が多い中、お待たせしてしまったという事例も起こっておりますので、初診の患者様でも、ご遠慮なく予

約のお電話を頂けますと、空いている時間をご案内できますので、よろしくお願い申し上げます。

　また、今年度からは、手術室の看護師が外来でも担当することで、外来から入院、手術に至るまで、顔が見える看護を行うことができ、患者様からも安心したという声をいただいております。これからも、患者様に安心して治療を受けてもらえるよう、努力して参りたいと思います。

（野下 純世）

健康管理センター

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

健康管理センター長　　横山　昌典

事 務 職 員　　1 名

2. 臨床実績

2022 年度健診実績	
企業検診	1100 件
協会けんぽ健診	740 件
特定健診	378 件
人間ドック	11 件
合計	2,229 件

その他、福岡市がん検診として、胃がん検診 31 件、大腸がん検診 45 件、前立腺がん検診 18 件がありました。また、肝炎ウイルス検診は 2 件施行されました。

3. 1 年間の活動と今後の展望

健康管理センターは、医師 1 名と事務職員 1 名を中心に健診部門の運営を担当しています。健診運営会議を月 1 回開催し、円滑な体制作りに努めています。また、衛生委員会も併設されており、当院職員の健康管理を行っています。

健診専属医師がいないため、健診患者数を大きく増加させる事は不可能な状態ですが、コロナ渦で健診受診者数が減少しているという社会現象の中、当センターでは若干の増加が見られました。新規の依頼にも可能な限り対応しています。

当院では、健診部門と一般診療部門が混在しているため、健診受診者に御迷惑をおかけしているのが現状です。しかし、異常が見られた時に早急かつ円滑に 2 次精査・治療を行える事が可能であり、メリットでもあると考えています。受診者に、わかり易く、有意義な健診となる事を目標にしています。

2023 年 4 月より医師が交代します。なるべく早くなれるよう努力したいと思っています。

（谷脇　予志秀）

薬剤科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

薬剤師　　7 名（パート 1 名含む）

クラーク　2 名（1 名：産休）

2. 臨床実績

抗がん剤無菌調製業務	277 件/年
薬剤管理指導件数	640 件/年（外来指導も含む）

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度の調剤処方箋枚数は月平均約 2000 枚、注射処方箋は月平均約 3700 枚でした。

入院患者さんの鑑別件数は、月平均約 180 件、年間 2150 件、薬剤科ではできる限り患者さんの持参薬を使用することで、患者様の自己負担の軽減や医療費の削減に取り組んでいます。

薬剤科が主体となる委員会においては、薬事審議会を通して採用薬の期限切れ情報を医師に周知し、さらに 2021 年度から高額医薬品管理システム「キュービックス」を導入し、高額な冷所医薬品の在庫管理や品質管理業務の効率化を行い、廃棄コスト削減の取り組みを行っています。

後発医薬品の取り組みにおいては、前年度から継続して約 100 品目の薬剤を後発医薬品へ変更し、後発医薬品調剤体制加算Ⅰを継続して算定できる月もあり、在庫金額も大幅に削減する事ができました。しかし、製薬会社の医薬品の納入規制もあり在庫管理については頭を悩ます日々が多くありました。（2023 年 2 月時点：後発医薬品の割合 92%）

今年度は薬剤師の人員も安定し、一般病棟での入院サポート介入を継続的に行う事ができ、入院時に患者さんがどんなお薬を今まで服用していたのか、重複したお薬はないか、医師・看護師と情報共有を行い、その後も継続した服薬指導やカンファレンスへの参加、自宅退院される患者さんへの退院指導にも介入できる取り組みを行ってきました。その結果、薬剤管理指導件数は昨年と比べ大幅に増加する事ができました。また、認知症ケアラウンド、心リハ回診、DM 教室にも積極的に参加し、チーム医療にも貢献することができました。

次年度は、今年度確立してきた業務を継続的に行い、チーム医療へ貢献できるようようスタッフ全員で取り組んでいきたいと考えています。

（貝田 裕彰）

臨床工学科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

臨床工学技士　5 名(育児休暇取得者含む)

2. 臨床実績

医療機器管理台数	158 台		
定期点検件数	508 件	日常点検件数	15,328 件

3. 1 年間の活動と今後の展望

【血液浄化療法業務】

2022 度は、透析装置および透析液供給装置、RO 装置等の透析関連機器の更新を行いました。機器の選定から導入前教育、導入時の水質管理や調整等に取り組み、更新後もトラブルなく安全に治療を行うことができました。

血液浄化療法センターには多人数用透析装置 23 台、個人用透析装置 6 台があり、月平均 55 名の患者様の治療を行っています。透析通信システムや排水除害装置を含む透析に関連する全ての装置の保守管理に臨床工学技士(CE)は携わっています。特に透析用監視装置については、メーカー主催のメンテナンス講習を受講し、洗浄・消毒・点検・部品交換・調整に至るまで全てを当科で行っています。それらを通して、日頃より技術の定着と向上に取り組み、90%以上のトラブルを科内で対処し、治療中の装置トラブル防止にも寄与しています。また多様な病態やニーズに対応するため、特殊血液浄化療法にも取り組んでおり、今年度は腹水濾過濃縮再静注法 5 例、血漿吸着療法 18 例を施行しました。その他、レオカーナ、LDL 吸着や持続血液透析濾過にも対応することができます。

昨年度に引き続き、COVID-19 患者の透析治療にも対応しました。他患と交わることのないように陰圧テントを用いた空間隔離と時間的隔離を行い、感染を広げることなく治療を継続させることが出来ました。

近年、血液透析と比較して透析アミロイドーシスや透析困難症などに対する効果が期待される OHDF のニーズが増加の一途をたどっています。当センターでは、慢性腎不全で治療されている患者様のうち半数以上の患者様は OHDF 治療を行っています。2022 年度は、透析装置の入れ替えがあり、一定期間 OHDF が出来ない期間があったにも関わらず 1 割程度増加しました。OHDF 実績：3899 例(前年比 110%)

OHDF を行うためには透析液の厳しい水質管理が求められるため、透析液安全管理責任者研修を受講し、毎月の水質検査をはじめとする透析液清浄化に取り組み、日本透析医学会で定められた超純水透析液の基準を開設から現在にいたるまで達成し続けています。

【医療機器管理業務】

院内で使用する人工呼吸器・シリンジポンプ・輸液ポンプなど 100 台以上の医療機器を安全に使用するため、中央管理化し保守管理・点検・修理を行っています。また、毎日、病棟・外来の医療機器巡回を行い、適切に使用できているか、不具合はみられないか等を点検しています。

手術室では、手術中の装置トラブルを未然に防ぎ、円滑に手術が進行できるように麻酔器や生体監視モニター、眼科手術装置、無影灯などの点検をおこなっています。

その他、各部署からの医療機器に関する相談、看護師やその他の職種を対象に医療機器研修会なども行っており、2022 年度は 28 件の研修会を実施しました。

今後も、専門分野の知識向上を図り、安全な医療機器の提供に努め、チーム医療の一員として地域医療に貢献出来るよう努力してまいります。

（藤本 菜摘）

臨床検査科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

検体検査部門　臨床検査技師　 3 名

生理検査部門　臨床検査技師　 3 名

2. 臨床実績

【検体検査】

生化学的検査	生化学	338,918
	その他	2,514
血液学的検査	血 算	20,486
	凝 固	5,171
	HbA1c	7,295
	その他	10,332
尿・糞便等検査	尿定性	8,985
	尿沈査	2,692
	便潜血	2,119
	その他	1,434
免疫学的検査	CRP	10,714
	感染免疫	8,107
	血液型	157
	不規則抗体	238
	ｸﾛｽﾏｯﾁ	454
その他		130

【生理検査】

循環機能検査	心電図	5,904
	ﾎﾙﾀｰ心電図	176
	その他	555
呼吸機能検査	肺活量等	145
超音波検査	胸腹部	1,173
	心 臓	893
	頸動脈	321
	下肢血管	87
	甲状腺等	80
脳波検査等	脳 波	38
	SAS 検査	23
神経・筋検査	誘発筋電図	64
	筋電図	2
その他		2,249

＜新規購入装置＞

POCT 用遺伝子検査装置(ID NOW™)

3. 1 年間の活動と今後の展望

新型コロナウイルス感染症流行も 3 年目となり、臨床検査科もこれまで抗原定量検査・遺伝子検査などにて検査体制を整えてきましたが、更なる感染拡大にも対応できる検査体制の充実と迅速に検査結果を報告する為に、検査機器を 1 台増設しました。

看護部の協力を得ながら計 4 台の検査機器を用いて感染対策に取り組んだ結果、院内実施検査件数は前年度に比べ 1.8 倍となり、可能な限り地域の方々へ新型コロナウイルス検査を提供する事ができたと思います。

また、コロナ禍で延期となっていた病院機能評価受診も無事終わり、通常医療への移行と共に、大きく落ち込んでいた検査件数も戻りつつある一年となりました。

次年度は新型コロナウイルス感染症が 5 類移行となりますが、今後も感染対策を継続し、「正確かつ迅速な検査結果報告」をモットーに医療を通じ地域社会へ貢献できるよう、日々精進して参ります。

（小野 一充）

栄養管理科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

管理栄養士　2 名　　栄養士 1 名

〈委託〉　管理栄養士　2 名　　栄養士　4 名　　調理師　2 名

〈委託パート〉管理栄養士　2 名（実働 5H）　　仕込み　4 名（実働 5H）

朝昼洗浄　　5 名（実働 5.5H）　　夕洗浄　3 名（実働 3H）

調理補助　　5 名（実働 7.75H、5.75H、4H）

春分の日の献立

2. 臨床実績

月	食事指導件数 入院件数	食事指導件数 外来件数	糖尿病教室実施状況 実施回数	糖尿病教室実施状況 延べ人数	栄養管理計画書 作成件数
4	12	12	13	19	337
5	4	19	5	10	316
6	7	23	13	23	348
7	11	14	18	32	288
8	6	9	0	0	341
9	4	13	0	0	337
１０	14	10	17	36	319
１１	10	6	6	6	319
１２	10	10	18	40	331
1	12	11	13	18	294
2	12	8	17	38	304
3	13	19	14	20	331

一般食	食数	特別食	食数
常食	64.2	エネコン食	91.3
軟飯軟菜食	32.9	術後 6 回食	0.5
全粥食	20.8	易消化食	0.0
3・5・7 分粥食	0.8	低プリン食	0.0
流動食	1.0	低残渣食	3.1
嚥下訓練食	59.8	脂質制限食	0.4
かりん食	22.0	蛋白制限食	23.0
オーダー食	2.7		
延食	1.4		
ヨード制限食	0		
術前補水食	0		
短期ドック食	0		
濃厚流動食	27.7		
一般食小計	233.3	特別食小計	118.2

令和 4 年度

1 日平均食出数合計　　351.5 食

3. 1 年間の活動と今後の展望

栄養管理科では、昨年度同様に感染対策を念頭に自己管理を行って業務に取組みました。

適切な栄養管理を行い、多職種と連携してチーム医療に努め、特に機能評価審査においては、A 評価を得ることが出来ました。今後も低栄養患者に対して情報を多職種で共有し、しっかりと対応していきたいと考えています。患者層の高齢化が年々進んだこと、それにコロナの影響もあり、食事の指導件数は減少しています。その中でも食事のアドバイスの必要な患者さんに積極的に関わっていきたいと思います。

度重なる食材高騰の中、栄養補助食品をはじめ業務委託内容の見直しを行いました。患者さんの様々な要望に応えることが困難となり大変残念ではありますが、より良い食事療養に貢献できるように努めて参りたいと思います。

（田代　由美）

リハビリテーション科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）　20 名
作業療法士（OT）　14 名
言語聴覚士（ST）　5 名
ケアスタッフ（CS）　4 名

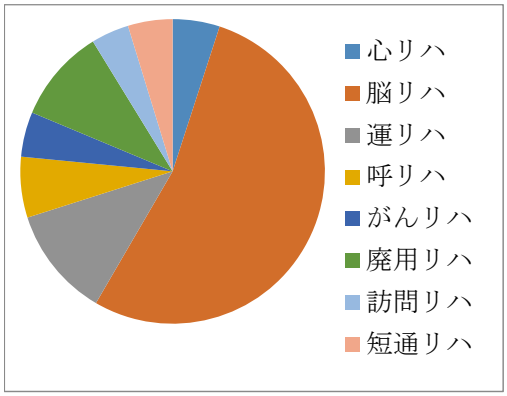
2. 臨床実績

リハビリテーション（以下リハビリ）科の診療内容は、医療保険下での各疾患別リハビリ（心大血管、脳血管、運動器、呼吸器、がん患者、廃用症候群）と介護保険の訪問リハビリ、短時間通所リハビリを実施しています。

2022 年度の各リハビリの実施単位数および件数は、以下（表 1、図 1）の通りとなっています。

（表 1）リハビリテーション実施件数

リハビリテーション種別	単位数・件数	
心大血管リハビリテーション	6276	単位
脳血管リハビリテーション	67057	単位
運動器リハビリテーション	14703	単位
呼吸器リハビリテーション	8113	単位
がん患者リハビリテーション	5978	単位
廃用症候群リハビリテーション	12465	単位
訪問リハビリテーション	5058	件
短時間通所リハビリテーション	5955	件



（図 1）各リハビリテーション実施割合

3. 1 年間の活動と今後の展望

リハビリ科は、2022 年度の目標を「リハビリ部門の充実」、「働きやすい職場環境作り」、「地域ニーズにこたえるリハビリ体制の整備」、「リハビリ部門の質の向上」とし、取り組みました。

「リハビリ部門の充実」は、一般病棟と地域包括ケア病棟間における退院支援に向けた連携向上を図るため共有情報の整理を行いました。また、チーム内のカンファレンスにて入院前情報や転帰先の受け入れ条件をキーワードに話し合う形を浸透させていきました。本取り組みの開始時は、病棟間転棟時のリハビリ目標が定まっていない事例が複数いる状況でしたが、現状は目標の共有が図れ、シームレスなリハビリの継続につながっています。

「働きやすい職場環境作り」では、科内のラダーを作成し試験的運用を開始しました。ラダー運用によりスタッフ個別の課題を把握でき、成長を促す部分を明確に示すことができており、本格運用に繋げる礎となりました。その他、子育て支援として、男性職員の育児休暇使用を推奨し、実際に 1 名の育児休暇取得となりました。

「地域ニーズにこたえるリハビリ体制の整備」は、市からの委託による介護予防教室とリハビリ科主催で行う壱岐南公民館での介護予防教室運営を継続しました。また、「福岡市西

区介護と医療の集い」にて、「フレイルと廃用症候群」「オーラルフレイル」についての講演を行いました。各取り組みは、地域の方の介護予防につながることを意識して取り組んでおります。

「リハビリ部門の質の向上」は、神経難病ネットワーク学会、パーキンソン病・運動障害疾患コングレス等、5 学会にて 7 演題の発表を行いました。神経難病ネットワーク学会では、優秀演題賞を頂くことができました。

その他には、学会等の参加 7 件（内 2 件は外部講演含む）を行っております。

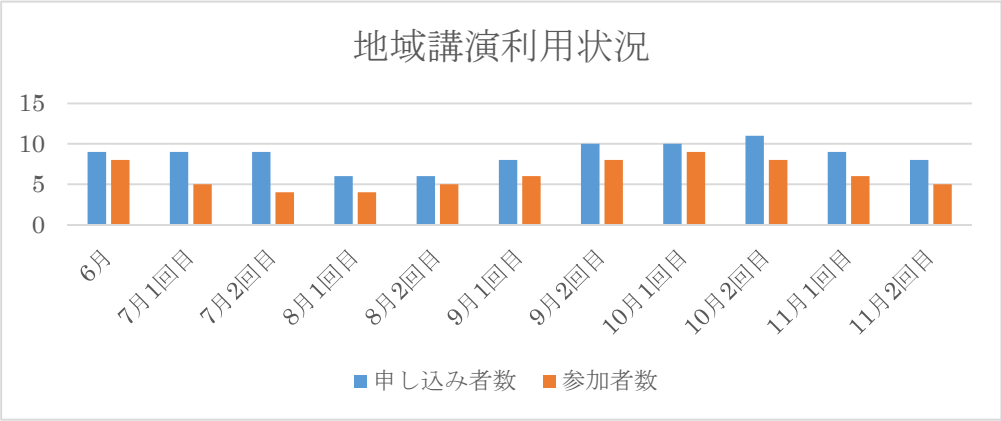
2023 年度は、患者様・利用者様へ提供するリハビリの質向上につなげるための職員教育を主にし、病院運営への貢献、意欲をもって働ける職場環境作りを行っていきます。リハビリの質としては患者様・利用者様の個別ニーズを把握し、その目標達成のためのリハビリ計画を検討する場を各カンファレンスで行っていきます。病院運営に関しては、各チームの成果実績を振り返る機会を半期毎に行い、チーム状況に合わせた対策案の策定、実行を行っていきます。職場環境としては、病院・科の方針、目標を基にした各チーム、各個人の目標設定を行っています。トップダウンの目標設定とすることで各個人に求める役割、行動を明確にし、同じ方向性・視点での取り組みにつなげていきます。その他、介護予防教室やフレイル対策など、地域の方の健康面への貢献を意識した取り組みも推進し、周辺地域の活性化につなげていきたいです。

（山口　良樹）

2022 年度介護予防教室（壱岐南公民館）

参加スタッフ PT：2 名

参加実績



申し込み者数平均 8.6 人

参加者数平均 6.2 人（定員 15 名）

近隣の公民館と連携し地域住民の方を対象として、介護予防教室を 6 月～12 月までの期間実施致しました。コロナ禍で様々な制限はありましたが、地域住民の方へ運動機会の提供ができ、介護予防の一助になったと考えています。

参加者には 6 月初回参加時に体力テストを実施。12 月終了時の体力テストと比較し運動の効果を実感していただいています。運動内容に関しては地域住民の方がどなたでもご参加いただけるよう、運動初心者の方から日頃運動されている中級者、上級者向けの運動内容をレベル分けして実施しました。

コロナ禍の制限により当初予定していた定員数までの参加はかなわなかったものの、一定数の方が継続して参加いただきました。次年度はより多くの地域住民の方に参加いただけるよう公民館との連携を強化したいと考えています。

（山口　良樹）

放射線科

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

放射線技師　4 名　　クラーク　1 名

2. 臨床実績

2022 年度業務実績　　（　）内は前年度件数

一般撮影	8184 件（8349）
骨密度測定	324 件（306）
ＣＴ撮影	2922 件（2708）
ＭＲＩ撮影	864 件（997）
透視検査	622 件（603）

時間外対応

コール回数	112 回（114）
撮影件数	224 件（176）

2022 年度　主な放射線関連機器

一般撮影装置
ポータブル撮影装置
移動式外科用イメージ装置
Ｘ線デジタル透視装置（DSA）
全身用骨密度測定装置
マルチスライスＣＴ（64 列）
オープンＭＲＩ（0.4Ｔ）
ＣＲ読取装置
ＰＡＣＳ（院内画像配信システム）
遠隔読影システム

3. 1 年間の活動と今後の展望

今年度も、日々感染対策を徹底しながらの業務でしたが、新型コロナウイルスの流行も徐々に落ち着き、ようやく通常業務へ移行しつつある 1 年となりました。

今年度の検査件数は例年と大きく変化はありませんが年々、CT 件数は増加傾向にあり、前年度に更新した CT 装置での検査の効率化と被曝線量の低減が増加につながったと思われます。

近年、放射線検査の医療被曝が問題となっておりますが、当院も医療放射線安全管理部会を発足し被曝線量について定期的に見直しを行い管理しています。また、職員に対しても被曝に対する正しい知識を共有してもらうため、研修を開催しておりますので、どうぞ安心して検査を受けられて下さい。

年々、高度医療機器による画像診断は進歩を遂げ多様化しており、これら膨大な画像データは遠隔読影システムを通して放射線科医による読影を行い、主治医とのダブルチェック体制をとっています。

私達はこれに対し充実した画像を提供できるよう医師との定期的な画像カンファレンスを行い、日々知識の向上と技術の習得に努めています。

また 24 時間オンコール体制をとり時間外での救急医療も対応しています。

今後も徹底した感染対策を継続し、地域の方々・近隣の医療機関の皆様へ安心と満足のできる医療を提供していきたいと思います。

これからも思いやりをもって患者様に接するよう業務を実践し、少しでも地域医療に貢献できれば幸いです。

（久間 伸彦）

看護部

１年間の活動と今後の展望

看護部の 2022 年度の目標

★患者さんが安心して地域で暮らせるよう、生活を重視したつなぐ看護の提供を行う

★ひとり一人が、働き方改革・病院経営参画に取り組み、業務改善・業務の効率化に努める

今年度より BSC（バランススコアカード）を用いて年間目標を立案し活動、評価しました。

１．財務の視点

病床稼働率は、全体で 84.2%で目標達成できませんでした。コロナのクラスターが４階、新４階、３階病棟で発生し稼働率に影響したと考えられます。ベットコントロールにて各部署長に増患に関するプレゼンをしてもらい稼働率アップの意識づけは出来ました。

10 月に４階病棟と２北病棟をチェンジし病棟編成を行い、救急車やケモ、心不全、OP など看護必要度の高い患者（本来の急性期の患者）は積極的に一般病床にて受け入れるようにし、必要度 17%以上を維持でき、R５年２月から入院基本料４を算定できました。３階病棟の在宅復帰率がクラスター発生時に基準を下まわりましたが、その後はクリアできました。

２．顧客の視点

9月27日、28日病院機能評価受講し C 評価なく認定されました（緩和ケア病棟は全部 A 評価）。ケアプロセスは3階病棟と4階病棟、緩和ケア病棟が受講し良い評価を得ました。機能評価受講の準備にてマニュアルの見直しや看護の見直しができましたので、今後、B 評価を改善できるように分担して質の向上に努めていきたいと思います。

苦情、クレームは他患者の病棟内電話に対して、コロナによる面会制限やスタッフの態度や言動に対して指摘、テレビカード紛失など数件みられましたがサービス向上委員会と協力して患者からの要望などは速やかに対応していきました。今後も各部署での患者サービスの見直しを行っていきたいと思います。

入退院支援看護師3名は、地域連携室所属とし各部署担当者を決め、部署の入退院支援とMSWの負担軽減に努めました。

３．業務のプロセス

月平均１００時間前後の時間外勤務が発生してます。コロナクラスターやコロナ罹患、濃厚接触者などで人員不足も影響し時間外の削減は出来ませんでした。電子カルテにて記録のセット化（2 北病棟が TQM 活動）や入院時アセスメントシートの活用や記録員会にＭＳＷやリハスタッフにも参加してもらい重複を減らすように努めました。

コロナ病床へは各部署１名ずつ選出し、クラスター発生病棟へは他部署からの応援を調整し協力し合えました。土曜、日祝日は、外来看護師が忙しい部署へ応援にいく体制を整えました。

４．学習と成長の視点

今年度より e-ラーニングを導入し教育委員会を中心に活用していますが、受講は個人差が大きく、各研修コースや院内研修へ計画的に取り入れ活用を促しました。

個人目標を各部署掲示しお互い共有でき、クリニカルラダーの認定者は２２名でした。

リフレッシュ休暇は一部を除いて取得できました。

今年度もＣＯＶＩＤ-19 の受け入れ、発熱患者の救急車受け入れ等、積極的にＣＯＶＩＤ-19 への対応に取り組みました。コロナ禍の中で、全職員の協力のもと病院機能評価を受講し認定され、九州厚生局適時調査も無事に終えることが出来ました。来年度からはＣＯＶＩＤ-19 も 5 類に移行しますので、円滑な移行になるよう取り組み、安全で質の高い看護を提供できるように努力し、働きやすい環境を整えていきたいと思います。

（江口 敦美）

2 階北病棟

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

看 護 師　　20 名　　介護福祉士　　2 名　　ケアスタッフ　　1 名

病棟クラーク　　1 名

2. 臨床実績

入院件数　:540 名

退院件数　:328 名

転棟件数　:247 名(地域包括ケア病棟+緩和ケア病棟)

病床稼働率 :81.6%

循環器心臓リハビリ件数 :48 例

ペースメーカー植え込み術・ジェネレーター交換術 :33 例

化学療法件数: 50 例(悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄異形成症候群、ATL、白血病など)

3. 1 年間の活動と今後の展望

2 階北病棟は内科を主とした急性期治療を担う一般病棟です。循環器内科、血液内科を主とし、心不全・不整脈治療、ペースメーカー移植術、ジェネレーター交換、化学療法などを行っています。その他、急性期疾患の対応も行っており当院の救急搬入受け入れを主となって行っています。また、がん・心不全の終末期の看護や急性期治療が終えた患者が、速やかに地域包括ケア病棟へ行けるよう入退院支援にも力を入れており、多岐にわたる疾患に対しより良い看護が提供できるよう、専門知識の向上や患者、家族との意思共有、療養環境の整備に努めています。

コロナ禍においては、急性期治療を担う、入院患者の入れ替わりの多い病棟だけに感染対策には最新の注意を払い、入院時の徹底したコロナ検査、入院中の患者の状態変化に早い段階で気付き対応するなど、日々感染対策に努め病棟内での陽性者発生時も迅速に対応し、感染拡大を防ぐことができました。今後はコロナの第５類への変更に伴い、入院前スクリーニングの実施状況や感染対策状況が変化していくことが予想されますが、状況に柔軟に適応し引き続き感染対策を徹底していくことが課題であると思います。

院内 TQM 活動では、「Good by over time」のテーマで、時間外労働の削減にとり組みました。緊急入院により時間外労働が多くありましたが、TQM 活動での記録のセット化、業務の見直しで大幅に時間労働の外削減ができ、患者さんへのケアの時間が確保できました。 今後も効率の良い記録、業務を意識し改善を図っていきたいと思います。

今後の展望としては、2023 年度より整形外科医師が常勤となり整形外科の手術も増えることが予想されます。周術期の看護や、整形外科看護に対しても対応できるよう、専門知識の習得に努めたいと思います。病棟再編成により一般病棟の病床数が減ったため、包括病棟へのベッドコントロールがさらにスムーズとなるよう、関係部署と連携し取り組んでいきたいと考　えています。

（河野 真紀）

2 階南病棟

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

看護師	19 名	ケアスタッフ	3 名	クラーク	1 名

2. 臨床実績

一般病床稼働率	79.4%
地域包括ケア病床稼働率	84.8%

3. 1 年間の活動と今後の展望

2 階南病棟は、一般病床 10 床と地域包括ケア病床 27 床の混合病棟です。主に眼科と糖尿病を担当しています。2022 年度は眼科 750 名（うち外眼部 29 名、眼表面 4 名、前眼部 622 名、後眼部 85 名、特殊眼科手術 10 名）、糖尿病 87 名の患者さんに対応させていただきました。昨年度同様、眼科の手術を受けた患者さんにはコロナ禍が続きご家族との面会が制限されたため、心細い入院生活を過ごされたと思います。また、糖尿病の患者さんには、自主的に運動できる場所の確保や栄養士からの指導が縮小され、不自由な環境の中での入院となったことを心苦しく思っております。しかし、2022 年度も病棟内でクラスターを発生させることなく通常医療を皆様に提供できました。患者さんとそのご家族方には、感染予防対策にご協力にいただき感謝申しあげます。

今年度の取り組みとしては、リモートや資料のみで行っていた糖尿病の勉強会を製薬業者も交え、集合して開催することができました。これまで、患者さんとご家族の指導に役立つことができるよう、病棟看護師の知識を深める目的として医師を中心に昼のカンファレンスで定期的な勉強会を継続していました。その中で、今年度は外部との勉強会を数回開催することができ、各インスリンのバイオシミラーをはじめ GLP-1 の内服薬など、糖尿病治療の最新情報と知識を得ることができました。現在、糖尿病は上手にコントロールができれば、糖尿病ではない人と変わらない寿命と生活の質（QOL）を得ることができると言われています。これからも糖尿病チームと一員として、医師や管理栄養士、リハビリセラピストや薬剤師、検査技師とともに多職種で患者さんとご家族の QOL をサポートしていきます。

（犬束 由起子）

３階病棟

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

看 護 師	19 名	准看護師	3 名	介護福祉士	2 名
ケアスタッフ	2 名	キーパー	3 名	クラーク	1 名

2. 臨床実績

平均在院日数：　30.4 日
居住系介護施設も含めた在宅復帰率：　81.79%
病床稼動率　：　85.76%

2. 病棟の特徴

地域包括病棟 38 床

3F 病棟は急性期治療を終了し、すぐに在宅生活に移行するには不安のある患者さんに対して在宅復帰を支援する病棟です。内科、整形外科など様々な疾患の患者さんに対応しています。在宅介護をしている家族の負担軽減のため定期的なレスパイト入院も受けています。60 日間という限られた入院日数の中で多職種での連携をとり支援しています。

2022 年度もコロナ禍でのベッドコントロールの難しさを感じる 1 年となりました。周辺の病院や施設でもクラスターが起きることがありそのたびに対応はしてきましたが、その影響が病床稼働率や入院実績に反映していたように思います。年間の病床稼働率は 85.67%と目標には届かず、平均在院日数も 30 日を下回ることがありました。整形外科の入院患者数が以前に比べ減少しており在院日数の減少に影響したと考えられます。

スタッフ一人一人の退院調整に関しての意欲や能力は徐々に向上しておりそれぞれが患者さん、ご家族の意向を踏まえた調整ができるようになってきています。少しずつコロナ禍以前の診療体制に戻ってきていますので来年度は目標を達成できるようにスタッフ一丸となって頑張りたいと思っています。

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度は看護研究で「ユマニチュード学習導入による看護師の認識と看護実践の変化」について院内発表を行いました。ユマニチュードについての標語呼称を毎日実施していましたが、看護実践の定着を図る上で学習が必要であること。また、実践困難なユマニチュードに対しては看護師全員で情報共有を行い、看護実践に取り組んでいくことがより良い認知症ケアを提供する上で求められることなどが明らかとなりました。

認知症を有する患者さんの対応を日々行う中でスタッフが感じているジレンマを一つでも解決できるように、ユマニチュードに関する学習を行うことで日々のケアに変化が生じるなど今後に生かすことのできるいい結果を得たと思っています。今後は 2023 年度の福岡県看護協会での発表を目標に準備を行っていく予定です。

（廣畑 直子）

新 4 階病棟

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

正看護師　20 名　准看護師　2 名　介護福祉士　1 名　ケアスタッフ　2 名
キーパー　2 名　クラーク　1 名　MSW　1 名（専任）

2. 臨床実績

延べ入院数	：845 名
新入棟患者数（転入数）	：35 名
新退棟患者数（転出数）	：27 名
病床稼働率	：86.6%

3. 1 年間の活動と今後の展望

当病棟は主に神経難病（パーキンソン病（PD）・筋委縮性側索硬化症（ALS）・多系統萎縮症（MSA）多発性硬化症（MS）脊髄小脳変性症（SCD）大脳皮質基底核変性症（CBD））が進行して身体的障害のある患者さんを対象とした『障害者施設等一般病棟』です。

神経難病は原因・治療法が確立していない疾患で、症状も様々かつ進行するので日常生活動作（ADL）が低下し、よくつまづく、歩けなくなる、飲み込みが悪くなる、流延（よだれ）が増える、よくむせるなど日常生活に支障をきたすようになります。私達は患者さんが出来るだけ在宅または希望の場所で過ごせるように介助し家族への指導も行います。現在当病棟ではレスパイト入院を推奨しており、在宅療養中の患者さんが入院してリハビリしたり、検査したりする間、介護する家族の負担軽減も図っています。レスパイト患者は約 40 名前後　以前より減少傾向にあります。それは進行する疾患であるこそ在宅での療養が限界となり、施設へ入所したり、療養型の病院へ転院されたり、亡くなられるケースが重なっている状況にあります。定期的、または不定期にレスパイトは可能で、家族の介護負担にもなり集中してリハビリが行えるメリットがあります。コロナ禍の影響で外出・面会など制限があるでデメリットもありますがそれでも入院すると動きがよくなる等のお声を頂き、入院して下さる患者さんもいらっしゃるので、減少したレスパイト入院患者数を増やすように、運営会議を始めたり、新規レスパイト患者さんの獲得に向け、リハビリ・MSW と共に努力しています。

当病棟は神経難病で ADL の低下があり、転倒・転落防止もしているが、転倒する患者さんが多く見られます。ヒヤリハットは約 50 件、そのうち転棟・転落 19 件同じ患者さんが何度も転倒を繰り返すので何度もカンファレンスを行い転棟・転落防止対策に取り組んでいます。

在宅支援では訪問診療・訪問看護・MSW と連携、他事業所の居宅介護センターや訪問看護ステーション・とも連携を図り、継続した看護や在宅での情報交換も積極的に行っています。昨年度は ALS で気管切開施行し呼吸器装着し在宅を目指す患者さん・家族の転入を受け、何度もカンファレンス・情報交換・家族への指導重ねて在宅へ 2 例以上送り出しています。現在も 1 例の患者さんの在宅に向けた指導等を実践しているところです。コロナも 5 類となり、面会等が緩和されて患者さんとの面会も可能となりましたが、当院での基準策を設けて実践しています。院内でのコロナ感染・アフターコロナの受け入れ・クラスター起こさないなど、感染対策も継続して行なっています。看護学生さん、患者さんまたご家族に快く同意して頂き、受け入れています。尚、当病棟は吸引・注入指導看護師もおり、他施設より対象の方を受け入れ、患

者さん、その家族の同意のもと指導をさせて頂いています。

今後とも感染対策、事故防止対策を徹底し患者さんが快く過ごせる環境を保ちつつ、看護を提供しスキルアップに努めて行きたいと思います。

（下谷　美樹）

緩和ケア病棟

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

医　師　3 名

非常勤　精神科医　　1 名（2 回/月）　　非常勤　口腔外科医　1 名（1 回/週）

非常勤　臨床心理士　1 名（1 回/週）　　看護師　22 名

ケアスタッフ　3 名　　クラーク　1 名　　ボランティア登録　30 名

2. 臨床実績

2022 年度延べ患者数　累計	5,711 名
新入棟患者数	233 名
新退棟患者数	229 名
平均在院日数	24.2 日
病床稼働率	90.2%（コロナ病床稼働も含む）
在宅復帰率	16.6%

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度は前年度と比較すると、新入棟患者数、新退棟患者数共に 40 名程増加し、平均在院日数も 28.8 日から４日程短く、今年度は患者さんの入れ替わりが多かった事が分かりました。近年、がん医療は進化し続けており、ギリギリまで治療を受け闘病を続けてこられた方も多くいらっしゃいます。治療病院では、まだまだ面会制限が余儀なくされる中、お一人で闘病されることがご本人、ご家族にとってどんなに大変な事か想像するだけでも心苦しくなるコロナ禍３年目でした。当病棟では徐々にですが面会制限（時間や人数）の緩和を図り、キュアからケアへギアチェンジをされる過程に寄り添い、伴走できればという思いで患者さん、ご家族と関わらせて頂いていますが、今年度は、そういう時間を持てないままのお別れも多くあったように思います。コロナ禍で私たち医療者も疲弊する中、退院された患者さんのご家族がご挨拶に見え「ここに来て良かった」と言って頂けることが原動力になりました。

また、新しい取り組みとして当院の緩和ケアに紹介を受け、サポートを開始するという流れを、緩和ケア病棟で担うようになりました。専任のスタッフを配置し平均 1.6 人/日の緩和ケア面談を行っています。情報共有を密に行うことで患者さん、ご家族が抱える問題や意向を聴き取り当院で出来うる限りのサポートを提供する。緩和ケア外来から、在宅サービスの提供、緩和ケア病棟での入院療養など、どこで生活することがその人らしく生きられるのか、外来、病棟、在宅チーム、病院全体で考えることが出来るように連携を強めます。生きていてよかったな、と思って頂ける心を込めたケアの提供と十分な症状緩和を図ることで「家に帰りたい」と思えるように緩和ケアを提供します。そして、次年度はコロナが５類となります。緩和ケア病棟らしさを取り戻す為の一歩、季節のイベントやグリーフケアのあり方を見直す年にしたいと考えています。

（高田 真弓）

中央材料室　手術室

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

看護師　　6 名

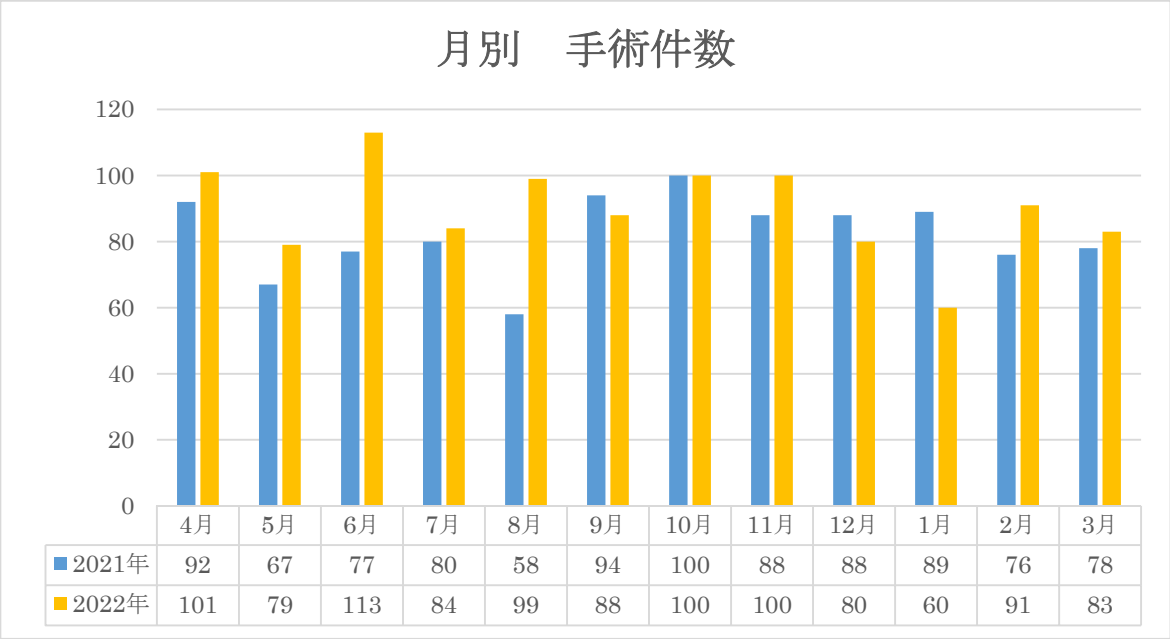
准看護師　　1 名

キーパー　　1 名（パート）

2. 臨床実績

手術症例数：1072 例

（内訳：眼科 1030 例　　整形外科 0 例　　循環器内科 33 例　　腎臓内科 9 例）



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2021年	92	67	77	80	58	94	100	88	88	89	76	78
2022年	101	79	113	84	99	88	100	100	80	60	91	83

3. 1 年間の活動と今後の展望

＜手術室＞

2020 年以降、COVID-19 の影響から手術の症例数が下降の一途を辿っていましたが、2022 年度は 1072 件と、前年後より 85 件増加しました。

当手術室は、「患者さんが安心して手術を受けられるよう「安全第一」に周術期看護の実践を行う」を看護目標とし、従来通り全患者さんへの術前・術後訪問の継続と眼科の術前外来（手術が決定した時点で手術室看護師による手術オリエンテーション）の実績を高めていきました。充実した術前外来を行うために、手術や麻酔については映像を用いた説明を行い、より深く理解して頂けるよう工夫しています。さらに、今年から手術室看護師も眼科外来業務に携わり、手術時だけではなく外来受診時から術後の診察時まで患者さんと関わることが出来るようになりました。その為、以前より充実した周手術期看護を提供できるようになりました。

＜中央材料室＞

中央材料室は病院全体の大量の物品を保有する部署であるため、常に使用状況や経済を意識した物品管理を行っています。的確な物品管理を行うことで、病院全体の円滑・効果的な医療の提供に繋げることが出来ました。また、業者による定期的な滅菌機器の点検やスタッフの適

切な滅菌方法や取り扱い技術で、リコールを発生させることなく滅菌の品質を維持することも出来ました。

＜今後の展望＞

今までは眼科手術が主となっていましたが、2023 年度より整形外科の症例が増加する予定です。整形外科手術看護師のスキルアップのため、積極的に研修会や勉強会に参加し最新の看護を患者さんに提供出来るよう、スタッフ一同日々研鑽に励んでいきたいと思います。

（坂田 夢乃）

外　来

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

看 護 師	18 名
看護師（パート）	4 名
准看護師（パート）	1 名
眼科視能訓練士	3 名
クラーク	5 名

2. 臨床実績

各診療科参照

3. １年間の活動と今後の展望

発生から3年が経過し新型コロナウイルス感染症が、5類になった現在も終息に至っていませんが、一連の感染症対策を徹底することができ外来体制を整えることが出来ました。

この新型コロナウイルスと向き合った３年間は外来患者の減少という打撃を受けながら、昨年よりコロナ禍で通常の体制を少しずつ取り戻すために、外来での症状観察を強化し日々の外来業務を行ってきました。昨年新型コロナウイルス第７・８波時は、地域の方々のコロナ検査を積極的に受けていくために検査件数を増やし発熱患者の対応を行いました。当院では、ID　NOW、ルミパルス、スマートジーン検査を使い分けながら患者の対応を行うことで、前年度より1.6倍外来患者の増加に繋がりました。

院内でコロナ陽性者の病床が稼働している期間は、外来スタッフも順次応援体制を作り、病院全体で協力する体制が定着しました。また外来では、新型コロナワクチン接種も行い、多くの地域住民の方々のワクチン接種が受けられるように現在も継続した体制を整えています。

当院は、内科・整形外科・眼科の診療が主となりますが、昨年は急遽整形外科診療が非常勤医師となり制限を強いる状況下で、手術適応患者は他医療機関での対応となりました。その為かかりつけの患者様にもお手間を取らせる事もあり、令和5年4月より整形外科常勤医師の体制が整うことができ、当院で手術を再開することになりました。

部署変化として昨年度は手術室と外来が統一されました。眼科外来では手術件数が増え、術前オリエンテーション・入院支援を手術室スタッフが対応しています。手術前から術後の一連に関わることで、患者様には安心して手術を受けて頂けるような取り組みを行っています。

外来患者様の多くは高齢者であり、家族の支援が得にくい老々介護をされているケースも多く見受けられます。そのような患者様が自宅で継続して生活できるように、新たに外来では多職種と連携し「フレイル予防入院」に取り組むこととなりました。今後は、外来患者回復を目指し地域の方々が安心して外来通院が出来るように、地域に寄り添った医療・看護提供が継続して行えるように診療体制を整えていきたいと考えています。

（高田　千寿香）

訪問看護ステーション　かりん

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

訪問看護師　7 名　（管理者 1 名含む）

理学・作業療法士兼任　　3 名　常勤換算数　0.5 名

医療事務　　1 名

2. 臨床実績

訪問看護の年次推移

	2020 年度	2021 年度	2022 年度
利用者の総数	584 名	602 名	606 名
訪問回数（リハビリ含む） 月平均の回数	4993 件 416 件	4587 件 382 件	5653 件 471 件
看護師による訪問の回数 看護師による月平均の回数	4440 件 370 件	3771 件 314 件	4396 件 366 件
新規契約者の総数	75 件 （内訳） 医療保険　63 件 介護保険　12 件	78 件 （内訳） 医療保険　56 件 介護保険　22 件	86 件 （内訳） 医療保険　66 件 介護保険　20 件
終了者の人数	74 件	59 件	77 件
看取りの人数	27 件	24 件	26 件

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度の利用者は、月平均で約 50 名でした。約 8 割が医療保険、2 割が介護保険の利用者となっています。医療保険で利用される方は、神経難病疾患や緩和ケアからの紹介が多いのが特徴です。介護保険での利用者は、村上華林堂病院の一般病棟や地域包括ケア病棟からの紹介、また居宅介護支援事業所、地域包括ケアセンターからの紹介で介入しています。主治医指示のもと、病状が不安定な方へは特別訪問看護指示書での頻回の訪問をし、病状観察を行いながら、家族への介護相談や指導も行っています。

緩和ケアだけではなく、訪問看護を利用される本人またはご家族へ、これから過ごす場所を確認しています。本人からは、「できるだけ家で過ごしたい」、「最後は自宅で死にたい」と話される方が多くなってきています。ご家族からも、「難しかったら入院をお願いするかもしれないけれど、できるだけ家でみてあげたい」と言われることが多くなってきています。

気持ちの変化もありながら柔軟に支えていく必要があると考えています。

今後も、主治医を含め、多職種との連携を図りながら、利用者とそのご家族が安心して生活ができるように質の高い看護の提供に努めていきます。

「家に帰れてよかった」、「家で最後までみれてよかった」、「看護師さんが来てくれるから安心」と思っていただくことに訪問看護師の価値があるのではないかと思っています。

スタッフ一同、その価値を大切にしていきたいと思います。

また、災害時に継続した看護の提供できるように業務継続計画を現在整備しています。

(森山　千絵子)

居宅介護支援事業所「かりん」

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

介護支援専門員　6 名　　事 務　1 名

2. 臨床実績

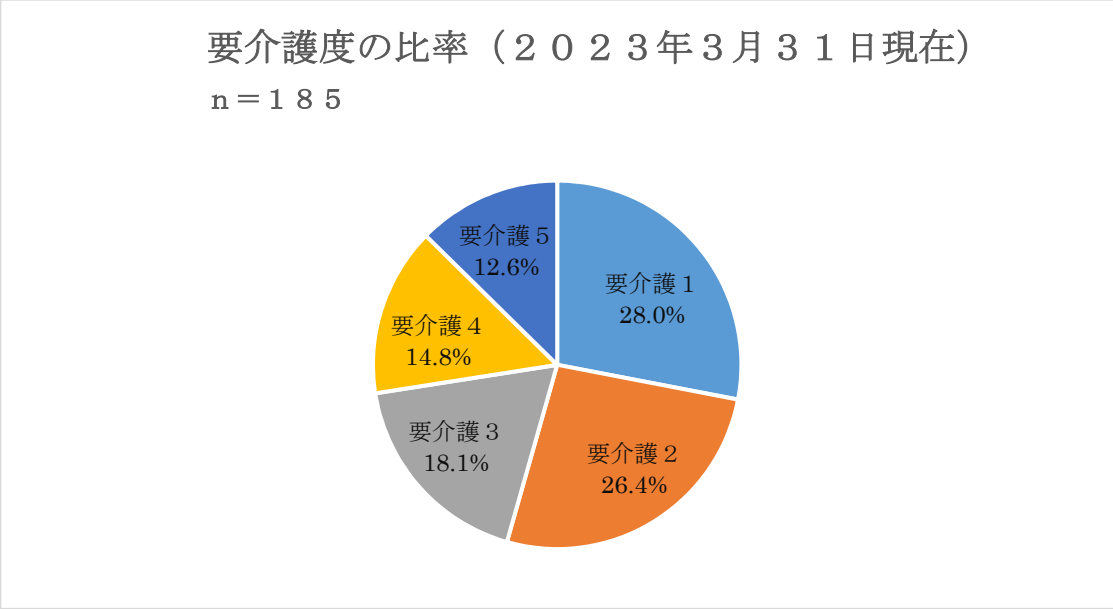
居宅支援件数実績

	2021 年度実績	2022 年度実績
年間支援件数	2, 362 件	2, 402 件
月平均件数	197 件	200 件

※特定事業所加算Ⅰ算定

※特定事業所医療介護連携加算算定

※2022 年度ターミナルケアマネジメント加算算定　６件



3. １年間の活動と今後の展望

2022 年度の居宅支援件数は、2021 年度から若干増加となりました。緩和病棟を中心に各病棟担当のＭＳＷや外来からの支援依頼もあり、緩和ケアや神経難病の利用者さんが比較的多いことが特徴です。地域包括支援センターからの支援依頼も定期的に相談があり、地域における当事業所の信頼と期待も継続して頂いていると感じます。

要介護度の平均では、要介護３以上の要介護度の高い利用者さんが４０％を超えるようになり、特定事業所加算Ⅰの算定が可能となりました。また、年間６件のターミナル期の利用者さんの在宅看取りに関わらせていただき、特定事業所医療介護連携加算の継続算定要件を達成できています。今後もターミナル期の利用者さん、ご家族が、人生の最後の時間を少しでも安心して過ごすことができるケアマネジメントを提供できるよう、２０２３年度も訪問診療の先生方や訪問看護師、ソーシャルワーカー等の多職種との連携を大切にしていきたいと思います。

利用者さんは、様々な病気や生活背景をお持ちです。加算要件を満たしつつ、幅広いニーズに対応できるよう、研修会や居宅連絡会への参加はもちろん、週１回のミーティング、毎月１

回の業務カンファレンスを行ない、介護支援専門員の資質向上や普段の業務改善を継続していきます。

今後も地域活動への貢献や、他機関・多職種との連携強化にも力を入れ、地域の皆様や関係事業所の皆様から、これまで以上に信頼される事業所を目指し、スタッフ一同努力をしてまいります。

（西島 勝也）

訪問リハビリテーション

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

理学療法士（PT）2 名　　作業療法士（OT）2 名　　言語聴覚士（ST）1 名

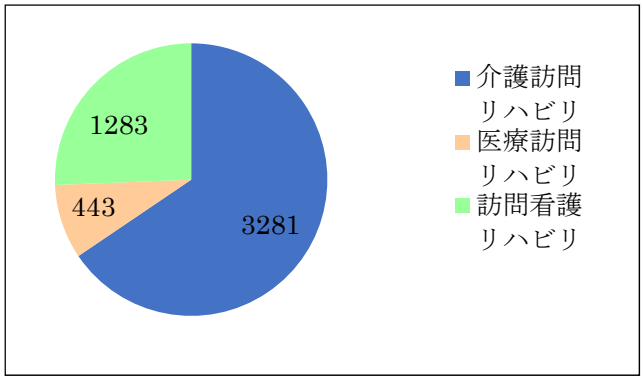
2. 臨床実績

訪問リハビリテーション（リハビリ）は、介護保険と医療保険の訪問リハビリ、および訪問介護ステーションからの訪問リハビリを実施しております。

2022 年度の実施件数は、別表（表 1、図 1）の通りとなっています。

(表 1)各訪問リハビリ実施件数

訪問リハビリ種別	実施件数
介護訪問リハビリ	3281 件
医療訪問リハビリ	443 件
訪問看護リハビリ	1283 件



(図 1)各訪問リハビリ実施割合

3. 1 年間の活動と今後の展望

訪問リハビリでは、2022 年度の目標を「利用者様の在宅生活継続」「リハビリの質向上」「業務効率改善」とし、取り組みました。

「利用者様の在宅生活継続」と「リハビリの質向上」は、訪問リハビリ利用者様の健康状態把握のための定期評価（表 2）を行うとともに、自立度が低下傾向にある方を早期発見し、入院加療を勧めることを行ってきました。また、定期評価の結果を基にしたチーム内カンファレンスの実施を行いました。結果、10 名の社会参加支援につながっております。

（表２）定期評価項目

①Hb-LSA（活動範囲）	②握力（筋力）	③FIM（ADL）
④MSQ（認知）	⑤Zarit8（介護負担）	

「業務効率改善」は、入院加療推薦者の紹介体制手順の修正、評価データ化の効率化、担当スタッフ休務時のチーム内フォロー体制の整備を行いました。結果、チーム内の時間が業務時間の減少につながりました（一人当たり月平均時間外業務；2021 年度 4.2 時間→2022 年度 3.1 時間）。

2023 年度は、チーム医療とシームレスなリハビリ提供体制の推進として、オンラインによるリハビリ会議の運営、退院後早期の集中的なリハビリ提供体制の確立を行っていき、利用者様の在宅生活の継続や社会参加活動の再開に繋げていきたいと考えています。

（山口　良樹）

通所リハビリテーション事業所（デイケア）

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

6-7 時間

理学療法士（PT）	5 名
作業療法士（OT）	1 名
看護師	4 名（パート 1 名を含む）
介護福祉士	8 名
ケアスタッフ	7 名（(パート 3 名を含む)）
事務	2 名

1-2 時間（短時間通所）

理学療法士（PT）	5 名
介護福祉士	5 名（パート 5 名、医療リハビリと兼任を含む）

2. 臨床実績

2022 年度の 1 日の平均利用者数・社会参加数は、表 1 の通りとなっています。社会参加率は 5%を超え、移行支援加算を算定しています。また、6 - 7 時間は、リハビリテーション提供体制強化加算を、1 - 2 時間は、理学療法士等体制強化加算を算定できるリハビリスタッフの体制があります。

＜表 1 ＞

	1 日の平均利用者数	社会参加数
6-7 時間	37 名	7 名
1-2 時間（短時間通所）	19.8 名	9 名

※ 社会参加＝ADL 向上や自宅での役割を持ち卒業された方。デイサービスへ移行された方々。要支援者の方も含む人数を示しています。

3. 1 年間の活動と今後の展望

通所リハビリテーションは、2022 年度の目標の中でも、「健康の維持・改善」、の項目に重点的に取り組みました。

「健康の維持・改善」においては、栄養状態や排泄コントロールの評価から利用者様に応じた対策を実施し、月に入院される割合が 8.2%から 6.4%へ減少しました。

2023 年度も「地域のお年寄りと利用者様が在宅において、その人の有する能力に応じ、その人らしく日常生活が出来るように支援します」を理念として、利用者様・ご家族により質の高い支援が出来るようにスタッフ一同努力をしてまいります。

（椎葉 博基）

事務部総務課

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

事務職員	8 名	（課長 1 名　主任 2 名）
事務職員（パート）	3 名	
ﾒｯｾﾝｼﾞｬｰ・管理（パート）	6 名	

2. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度は、以前より課題となっていた広報活動に本格的に着手しました。まず、A4 サイズ 18 ページだった病院案内をA4 三つ折りにリニューアルしました。情報量は少なくなりましたが、年度毎に更新することで、年度の取り組みなどのタイムリーな情報や、病院の特色などをわかりやすくお伝えできる内容となりました。

併せてホームページも大幅なリニューアルを行い、内容を充実させると共にデザインやページ構成を見直し、あらゆるデバイスからも閲覧しやすく改善しました。今後も皆様にご利用いただけるよう、有益な情報提供を行ってまいります。

年度後半より総務課の業務として、健康診断業務を担うこととなりました。ホームページを利用した申込受付や、お渡しする文書類の見直しなど、当院で健康診断をされる利用者様や企業様がより利用しやすくなるよう整備を進めました。システムへの予約作業なども簡略化する仕組みを取り入れ、時間短縮、間違い防止に努めています。総務課の業務増とはなりましたが、総務課職員がより病院業務の理解を深めることとなり、担当職員の大きな成長につながったと感じています。

2022 年度の活動は、病院増収につながる重要な業務であると考えています。村上華林堂病院に興味を持っていただいた方、利用された方が、多くの医療機関の中から村上華林堂病院を選んでいただけるよう、2023 年度も引き続き取り組んでまいります。

（瀬戸　早苗）

事務部医事課

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

事務職員（医事課内・受付含）	12 名
事務職員（医事課内・受付含）パート	6 名
診療情報管理室職員	3 名
医師事務作業補助者	6 名
医師事務作業補助者　パート	3 名
病棟クラーク　パート	4 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度の活動の中心は、前年度に引続き「働き方改革」と「スタッフ育成」でした。

働き方改革については、2019 年度から継続的に活動しており、これまで基本的に時間外に行なっていたレセプト業務について、時間内に行なえるよう体制を整備しました。結果、活動開始前の約１／３まで時間外業務を削減出来ました。今後も調整を継続し、子育て世代でも安心して働ける体制づくりを目指します。

スタッフ育成については、医事課内スタッフはレセプト業務について、全体的な底上げによりスタッフ間の業務量の偏りを軽減すること、返戻レセプト件数の減少させること、を目標としました。2 年前に開始した TQM 活動（返戻レセプト件数減少）を継続し、全員で返戻内容把握、再請求準備を行う方式をとることで返戻理由を理解するスタッフが増え、スタッフ底上げにつながっています。ただ、新型コロナ対応に伴う公費の複雑化により、医事会計システムで対応出来ない事例が増え、結果として返戻件数が増加している月もありますので、底上げ出来た分、全員で課題に取り組みたいと思います。診療情報管理室は、病棟クラーク、医事課内スタッフと連携し、病棟での必要書類不備、スキャン誤り等を減少させるべく取り組みました。また、電子カルテ導入期にストップしていた「質的監査」を再開し、診療録の質を更に向上させるための取組む体制を整えましたが、機能評価訪問審査時に、医師の関与が無い点について指摘を受けましたので、今後の課題とします。医師事務室については、昨年度より開始した腎臓内科医師の代行業務範囲を拡大する等、医師事務作業補助者としての活動の場を拡げるとともに、スタッフ底上げの為、陪席科のローテーションも継続しています。

医事課内スタッフについては、患者負担、レセプト請求及び診療に係る様々な業務、診療情報管理室については、診療録記載全般と国に提出する様々なデータ作成に関する業務、医師事務作業補助者については、医師が行う指示、記載等及び書類作成に関する業務、そして病棟クラークは、病棟における記録方法変更対応及び患者対応、と業務内容は異なりますが、それぞれが調整を重ね、当院に合った形を目指して活動してきました。今後もそれらの活動を継続していきます。

システム導入と時間外業務減少により、子育て中の職員も安心して働ける環境整備と、教育による医事課全体のレベルアップを今後も進めていきます。

（渡邊 英則）

地域連携室

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

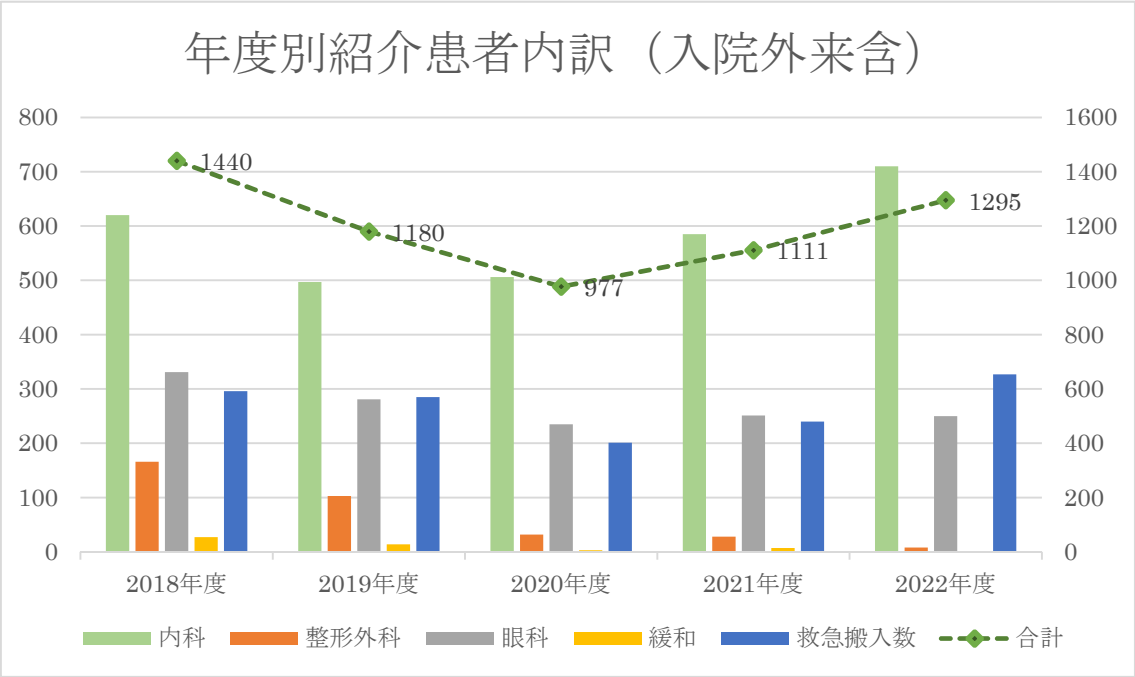
医師　　1 名

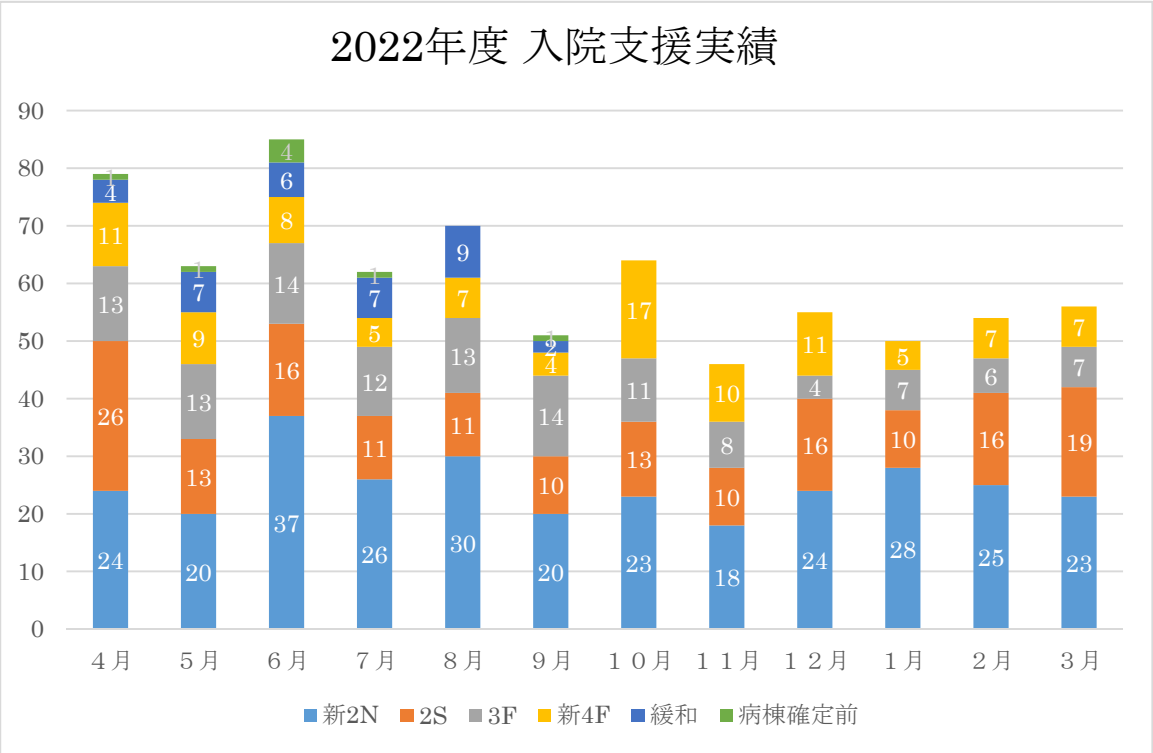
医療ソーシャルワーカー　　5 名

看護師　5 名

事務　　4 名

2. 臨床実績





3. 1年間の活動と今後の展望

〈連携業務〉

地域連携室は連携業務と入退院支援業務、総合相談業務を主な役割としています。その業務を通して地域の医療、福祉、保健機関との連携を図り、患者さんが安心して住み慣れた地域でその人らしい生活を送ることができるように支援することを目指しています。

連携業務は地域の医療機関や介護福祉施設などと密接な連携を図るための窓口となり、患者さんにより良い医療を提供できるよう努めております。具体的な活動としては、近隣のクリニックを年間約 400 回訪問し、返書を直接手渡しするなど顔の見える交流を心がけております。また、新型コロナウィルス蔓延後は「web 版　福岡西部介護と医療の連携の集い」を定期的に開催し、多数の施設、事業所の方々にご参加いただき、積極的な情報の交換を行っております。

地域包括ケアシステムの構築、推進が求められる中、在宅療養支援病院として切れ目のないシームレスな医療が提供できるよう今後も努力していきたいと思います。

（八島 佐知）

〈入退院支援業務〉

これまで総合相談室及び外来所属の看護師が予約入院の患者さんの入院時支援を行っていました。2022 年 10 月から地域連携室に入退院支援看護師を配置し、入院時支援だけでなく退院に向けた支援、退院後の生活支援を含めた一貫したサポートを行うようになりました。入院時の支援は入退院支援看護師が入院の当日にご本人、ご家族と面談を行っています。面談の内容としては主に入院前の生活状況、家族背景や住環境また、介護保険認定の取得状況や服薬中の内服薬の管理方法の確認、お薬のアレルギー、アレルギー食材を聴取します。治療がスムーズに行われるよう、退院へ向けた支援が入院時から取り組むことができるよう院内外の多職種とも積極的に連携をしています。

また、緩和ケア病棟へ入院を希望される方は事前に緩和ケア病棟の担当医師、看護師による面談を行い、安心して入院していただけるように支援を行っています。2022 年度は 735 件の入院支援を実施しました。

入退院支援を担当するスタッフは、入院する患者さんが安心して入院生活を送れるように、また退院後も住み慣れた環境、地域での生活が継続できるように入院時の早い段階から支援を開始し、カンファレンス等で各部署のスタッフと情報共有を行い、退院後の生活を視野に入れた支援を行っています。今後は予約入院の患者さんだけではなく、緊急入院の患者さんへも積極的に介入し、病気によって生じた様々な問題に対して患者さんやご家族と共に考え、解決に向けての支援を行っていきたいと思います。

（竹内　直美）

〈総合相談業務〉

正面玄関を入ってすぐのところに総合案内、総合相談窓口として月～金は 9：00～17：00 土曜日は 9：00～12：30 まで看護師 1 名が交代で常勤しています。

［相談受付：平日 16：30 まで・土曜日 12：00 まで］

相談内容としては外来受診相談、介護に関する相談、緩和ケア相談などご自身及びご家族のお困りごとや悩みなどのご相談をお受けしており、2022 年度は 223 件の相談がありました。

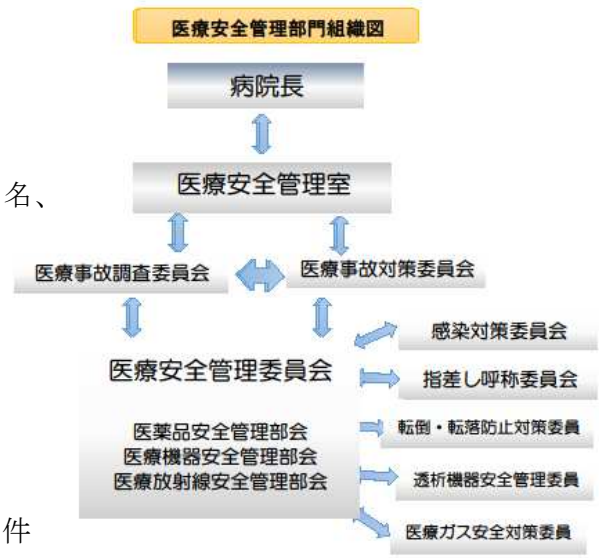
「あたたかい心で専門職として的確な看護を実践します」という看護部理念のもと、ご相談

内容に応じて、専門スタッフのいる各担当部署へご案内をさせていただいています。プライバシー保護の観点から個室での相談も行っています。情報共有を行い今後に繋げる為、カンファレンスを週１回開催しています。

オープンカウンターとなっており、今後もお声がかけやすく、相談をしやすい環境づくりに努めていきます。

（竹内　直美）

医療安全管理委員会



1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医師 2 名、医療安全管理者 1 名、看護部長 1 名、副看護部長 1 名

各部署責任者 18 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

1）2022 年度総括

事故報告件数は医療事故 6 件、転倒・転落 11 件と増加、針刺し・切創事故は 1 件と前年度より減少している。（図 1 参照）

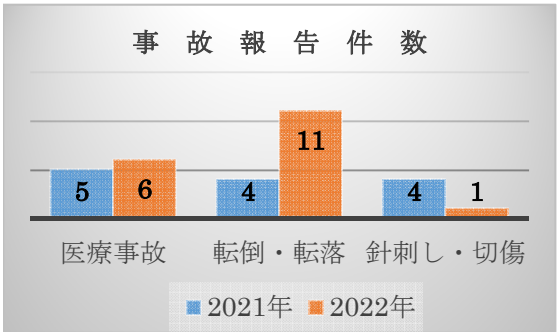


図 1　事故報告件数

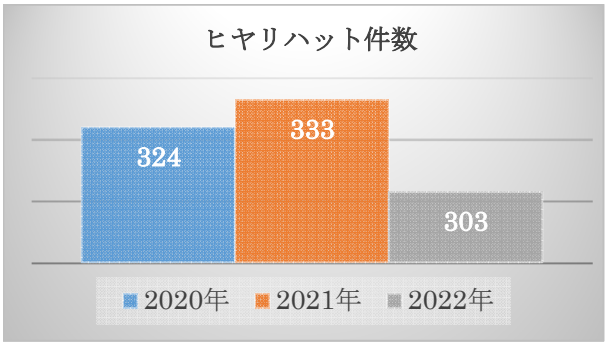
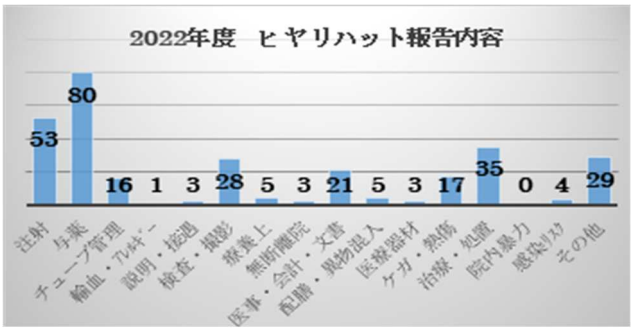


図 2　ヒヤリハット報告件数

ヒヤリハット報告件数は 303 件と前年度より減少、内容は与薬（26%）注射（17%）の順に多い。（図 2、3 参照）

ヒヤリハットレベルでは「レベル 0」報告が全体の 87.9%と前年度よりさらに増加、「レベル 2」は 50 件から 38 件と減少、「レベル 3a」は 21 件から 28 件と増加しており対策の検討・強化が必要である。（図 4 参照）



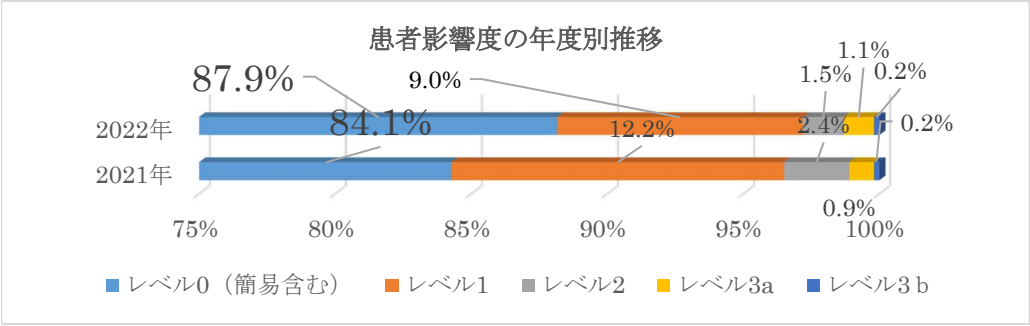


図 4　患者影響度の推移

また、オカレンス報告は2022年度「来院後24時間以内の死亡事例」5件、「予期せぬ死亡」1件の報告があり、医療安全管理室にて検討し、全て追加報告書の必要性なしとの判断であった。

2022年度に実施した主な取り組みは以下のとおりである。

（１）バルーンカテーテル交換の看護手順・基準改定

（２）転倒転落ヒヤリハット報告書、転倒転落事故報告書に抗凝固剤内服の有無、転倒転落カンファレンス実施日の記載項目追加

（３）全看護師対象に小型シリンジポンプ（TE-362）動画研修実施

（４）配薬漏れ防止のため、配薬後の配薬カートチェック実施開始

（５）二層式輸液開封忘れ防止のためのダブルチェック・注射レベルへのサイン開始

2）今後の展望

医療安全管理室メンバーが全部署を対象に年2回の定期巡回を行っている。定期巡回の結果、アレルギー項目の確認方法・入力方法の理解が不十分であり、再度周知するよう次年度の目標に挙げた。

薬剤に関するヒヤリハットの分析、対策検討は医薬品安全管理部会の中で継続する。またヒヤリハットレベル0報告の増加を受けて、正確なレベル判定のための体制つくり、再発防止への活用方法の検討、レベル2以上の報告件数の減少を目指して指差し呼称委員会での活動を活性化させる。

3）放射線安全管理部会活動報告

2022年度はCT導入より1年が経過し、被曝線量の更なる低下を目指し撮影条件の調整と管理を行いました。その結果、診断参考レベル（DRL s 2020）と比較すると60%程度に抑えた線量での検査を実施することができました。

また定期的な会議を開催し、被曝線量の適正化を検討するとともに職員への研修も開催し、被曝に対する正しい知識を深めました。

（三井 淑子）

医薬品安全管理部会

1. スタッフ紹介（2022 年 3 月 31 日現在）

薬局長 1 名（医薬品安全管理者）、医師 1 名、医療安全管理者 1 名、看護師長 3 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

1）2022 年度の総括

昨年度のヒヤリハット報告件数は全体で 307 件、そのうち注射・与薬に関する報告件数は 133 件（43%）であった。特に薬剤に関するヒヤリハットの中で「配薬漏れ」に対する事例が多かった。

薬剤に関するヒヤリハット事例の中には、薬剤の取り扱いミスによる事例もあり、「輸液製剤の取り扱い」について看護部を中心とした院内研修を実施した。また、院内で使用する院内製剤について見直しを行い、「院内製剤の調製および使用に関する手順書」を作成した。麻薬の運用については、特に時間外の使用について各病棟に周知を行い、日常業務における医薬品の適正使用や安全管理に活用できるよう努めた。

次に、昨年度から行っている「配薬漏れ」に対する対策の一つとして、今年度は全病棟で考案した対策を各スタッフが厳守しているかのアンケートを実施した事で、投薬時の手順を厳守することの必要性を周知できた。しかし、「配薬漏れ」に対するヒヤリハット事例の件数は減少する傾向には至らかなかった。

2）今後の展望

次年度も定期的に委員会を開催し、医薬品使用時の安全対策の実施が継続的に行われているかを見直すとともに、各部署での問題事項を把握しながら、事例の分析・対策に繋げていきたいと思います。次年度も薬剤に関するヒヤリハットの中で「配薬漏れ」に対する事例が多いため、引続き各病棟で対策を再度検討し、評価を行っていきたいと考えています。

（貝田 裕彰）

医療機器安全管理部会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医療機器安全管理者（常勤医師）1 名、医療安全管理者 1 名、看護師長 1 名、
臨床工学技士 1 名、　放射線技師 1 名、 臨床検査技師 1 名、 事務職員 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

医療機器安全管理部会は平成 19 年に発足し、医療安全委員会の部会として医療機器に係る安全管理を行っています。本会は必要時に開催され、以下の活動を行っています。

1. 医療機器安全管理部会議を開催し、医療機器に関する事故やヒヤリハット事例の検討と安全管理委員会への報告
2. 医療機器保守点検に関する計画の策定と実施
3. 医療機器の把握と管理および適切な情報提供
4. 人工呼吸器や体外式除細動器などの生命に直接影響を与える医療機器の厳重な管理と点検
5. 医療機器の添付文書の管理
6. 医療機器安全使用のための職員研修の実施
7. 医療機器の安全管理に関わる研究会や講習会への参加

2022 年度は医療機器に関するヒヤリハット事例は 7 件報告されました。報告の内訳は、機器導入後の初期不良を含む機器の故障が 2 件、医療機器関連医材の不具合が 1 件、教育・管理不足が 4 件でした。いずれも患者様に被害が及ぶ事故はありませんでしたが、教育・管理不足が原因の報告を受け、再教育、点検表の改訂を行いました。また、再教育を行った事例に関しては、教育終了 6 か月後を目途に簡易テストを実施し教育内容の定着度を確認しました。職員研修は計 28 回開催し、医療機器の安全使用に努めています。

（藤本　菜摘）

転倒・転落防止対策委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

委員長（看護師長）　１名

各部署（病棟、血液浄化センター、リハビリ、デイケア）代表スタッフ　１名

2. 1 年間の活動と今後の展望

年間目標

1）患者さんの療養環境を安全に保つことができる

2）転倒・転落予防に関するリスク感性を高める事が出来る

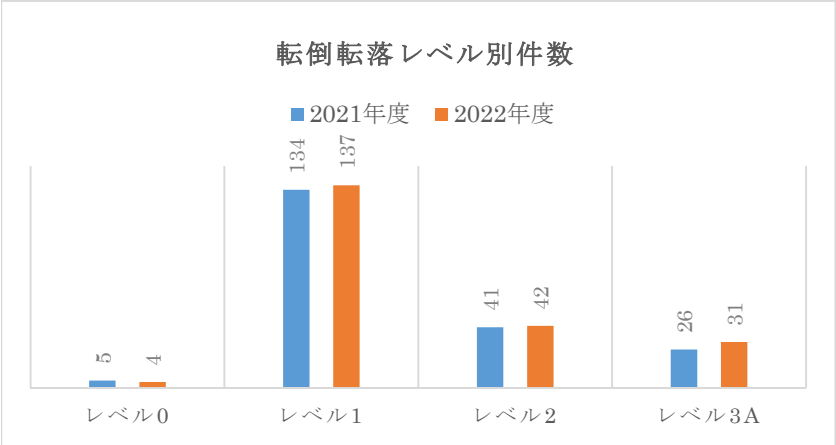
3）各部署の問題点を抽出し、改善に向けた取り組みができる

4）転倒・転落ヒヤリハット報告のレベル 2. レベル 3a を前年度より 10%減にできる

上記の目標をあげて一年間活動、2022 度のヒヤリハット報告は 214 件、昨年の 206 件を上回った。転倒の要因上位は「患者の状態把握不足」「不可抗力」「管理ミス」の順であった。「患者状態把握不足」は昨年の 70 件から 73 件へ増加している。スタッフのリスク感性を高めることで患者の状態把握不足が少しでも減少するような対策が必要となることがわかった。スタッフのリスク感性は個人で高めることは相当な努力がなければ難しく部署のカンファレンスの時間を使うなどして転倒リスクがある患者の対策を考える場をつくることが必要。ヒヤリハット報告書の改定を行い、転倒後のカンファレンスはほとんどの症例で実施されており繰り返しの転倒は減少しているため今後も継続していく。

各部署の問題点に関しては各委員が年間目標を立て活動、部署によってはヒヤリハット報告の件数を減少させることが出来ていた。来年度も各委員が部署の問題に目を向けた活動が出来るようにサポートが必要。レベル 2 は 40→41 件、レベル 3a は 26→31 件と年間の件数が増加したことに伴いどちらも目標であった 10%減には至らなかった。報告のほとんどの症例で転倒対策がとられているが、もう一歩踏み込んだ対策が今後必要になる。

（廣畑　直子）



指差し呼称委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

委員長（看護師長）1 名、　各部署(18 部署)代表スタッフ 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

指さし呼称委員会は、指差し呼称の意識向上とその徹底により、医療事故ならびにヒヤリハットを防止することを目的に設置されている。

今年度は、昨年度各部署で作成した「指さし呼称動画を活用し、指さし呼称に関する実践指導が出来る」を目標としていた。実際に使用し、実践指導に用いた部署は 4 部署のみであった。来年度の活用方法、新入職者へのオリエンテーションでの使用方法の検討が課題になる。また、前年度同様に自部署で起こる可能性のある事例を取り上げて KYT の勉強会の実施を行った。身近に起こりうる事例を使用することで、スタッフの指差し呼称への意識付けを行うことが出来た。

意識調査では、「効果があると思う」は 99%であり、前年度と変わらなかった。しかし、「正しい手順を知っているか」に、知っていると答えた職員は 83%であり、前年度より、3.1%減少していた。手順を知っており、知識はあるが、実際の現場で「確実に出来ている」と思っている職員は、35%と少なく、各部署で確実に実施できる確認方法を考えていく必要がある。

今回、指差し呼称を省くことがあるかの理由で「必要ないから」が 2%から 7%と増加している。「必要ない」の要因を確認、調査していく必要ある。

総合評価として、指さし呼称関連のヒヤリハットは前年度 64.7%から今年度 61.6%と減少しており、今後も継続した活動が必要である。

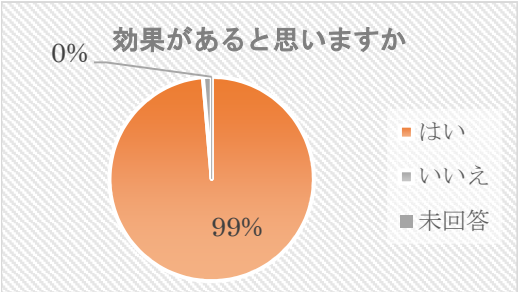


図 1 効果があると思いますか

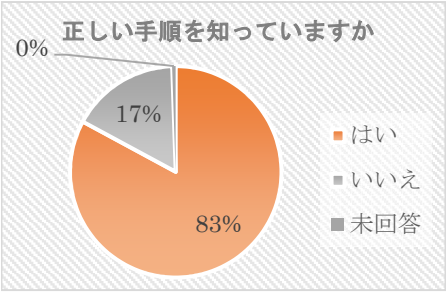


図 2 正しい手順を知っていますか

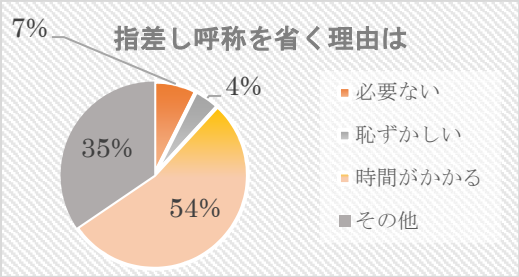


図 3 指さし呼称を省く理由方法

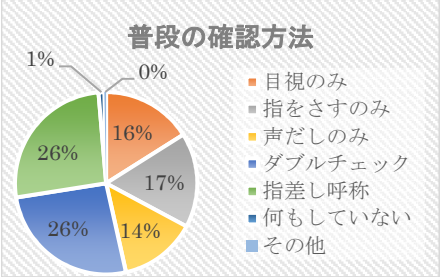


図 4　普段の確認方法

（山本　幸恵）

院内感染対策委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

病院長、　副院長（感染対策医）、　看護部長、　事務長、　感染対策看護師、　薬剤師、　検査技師、　総務課

2. １年間の活動と今後の展望

月１回、委員会を開催していますが、迅速な対応、提案を行うためにイントラネットを活用してコロナウイルス感染症に対する体制を構築しました。また従来の週１回の院内巡視に加え、コロナ対策として各部署の感染対策の巡視を追加しました。業務としては

１．　細菌　院内で検出された細菌の種類、耐性菌の動向についてサーベイランスを行い、抗菌薬の感受性を院内共有ファイルからいつでも供覧できるようにしています。CV カテーテルと尿道留置カテーテルに伴う感染症については検体数から毎月件数を計上していましたが当院では ESBL の検出が多く、年度後半から膀胱留置カテーテルについて重点的にサーベイランスを行い、検出菌、抗菌薬使用状況、留置の必要性について検討し抜去を促すように活動を開始しました。周術期感染もサーベイランスを継続しています。

２．　抗菌薬適正使用　使用する際には菌の同定ができているか、適切に臓器感染症の診断ステップを踏んでいるかなどをその都度確認するように促し菌血症が疑われる場合に常時２セットの血液培養を採取しています。各部署に JAID/JSC 2019 感染症ガイド、医療介護施設関連肺炎、市中、院内肺炎ガイドライン、呼吸器学会より 2017 年成人肺炎ガイドライン簡易版を配布。抗微生物薬の適正使用指針を各診察室に常備。カルバペネム系、抗 MRSA 薬のバンコマイシン、テイコプラニン、ハベカシンとゾシンは届出制で、ザイボックス、シベクトロ、キュビシン及び抗 CDI 薬フィダキソマイシンは許可制です。薬剤師が TDM を作成し適量投与と血中濃度による修正を行っています。抗菌薬の使用状況についても把握し偏りがある場合は医局会で伝達しています。西部地区で耐性菌や抗菌薬使用状況について情報交換を行っています。

３．　その他の感染症　新型コロナウイルス患者に対し外来ゾーニングにて患者動線を完全に分離、屋内に簡易ブース、屋外にプレハブを設置、PPE の実習実施、マニュアルを整備。抗原定量検査（ルミパルス）を導入し診療検査機関として複数検体の院内処理能力を向上させ冬季にはインフルエンザの抗原定量検査も同時に検査。入院時及び時間外に ID NOW（等温核酸増幅）を施行し 15 分で結果を出しています。今年度コロナ病床を４床確保し中等症 II までの患者さんの入院治療を行いました。当院ではがん患者、ハイリスク患者の診療を継続するべくウイルス感染症の侵入防御を行いながら安全に診療ができるように日々努力しています。

４．　教育　各病棟に ICN とリハビリにもリンクスタッフを新設し、対策の徹底や啓蒙活動を行っています。年２回、職員全員を対象に院内教育を E-ラーニングにて行いテストにより理解度を深めました。

５．　院内感染対策マニュアル　国立病院機構の病院感染対策マニュアル 2020 年 3 月増補版を参考にマニュアルを一新しました。新型コロナウイルス感染症に対するマニュアルを

イントラネット、電子カルテ内で表示していますがマニュアルにまとめて編集しています。

6．　資材の工夫　酒精綿、消毒スティックはディスポ製品、輸液、注射キット製品の導入などリスクの減少と包交車の廃止を施行しました。プラスチック針で針刺し事故の軽減を図り、個人用手指消毒製品を導入しました。新型コロナウイルス感染症の対応で PPE 再利用についてマニュアルを整備。院内備蓄を管理、報告体制を整えました。

7．　感染対策加算　当院は加算 2 を申請し福岡大学病院等と連携し医療感染対策の向上を図っています。感染対策カンファレンスに定期的に参加しています。手指消毒薬消費量を毎月カウントし部署へ報告が開始され啓蒙されるようになり高い使用量を維持しています。

（柴田 隆夫）

院内教育委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名　看護部 1 名　臨床検査技師 1 名　臨床工学技士 1 名　事務部 1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

教育委員会の役割は、研修を通して、信頼される医療の提供、質の向上はもとより、全職員の職場環境を改善しより健康的に業務が行えるように支援することにあります。毎月 1 回定例会を開催していますが、活動内容は１)研修に必要な物品購入の検討、2)　研修報告の受理、重要な案件の院内への周知、3) 研修の企画、実行、4) 院内の各委員会に依頼して行う研修の計画作成などです。医療安全、救急や感染対策など病院機能に必須の項目を含め幅広く研修を計画しています。今年度はコロナ感染対策のため、web や資料配布が主体でしたが感染対策、BCLS は部署毎に実習をおこないました。研修に参加できなかった職員のために、とくに感染、医療安全など重要な項目についての周知を図るため、研修のビデオ撮影を行い、後日閲覧するようにしています。救急蘇生、感染対策の充実のために実習用の人形、手洗いチェック用蛍光灯を購入し各部署で実習を行い診療レベルの維持を図っています。ハラスメント、個人情報についても連年、研修に取り入れています。必修項目として関連法規については各部署で周知を図るように企画しました。

（柴田 隆夫）

月	テーマ	概要	担当	参加数
4	BLS	実習	救急委員会	各部署で実施
5	感染対策	Web 研修、部署実習	感染対策	294
6	ACLS	実習（看護師のみ）	救急委員会	20
7	ハラスメント、虐待	Web 研修	サービス向上	289
8	ハリーコール	訓練	災害対策チーム	46
9	医療安全	Web 研修	医療安全	393
10	個人情報保護	Web 研修	倫理委員会	374
11	高齢者評価	Web 研修	循環器医師	359
12	接遇	Web 研修	サービス向上	全職員
1	感染対策	Web 研修	感染対策	342
2	医療安全 輸液研修（看護師）	Web 研修 Web 研修	医療安全	304 133
3	メンタルヘルス	Web 研修	衛生委員会	299

サービス向上委員会

1. スタッフ紹介(2023 年 3 月 31 日現在)

委員構成：事務部長、医事課長、総務課主任、通所リハビリテーション主任（理学療法士)、看護師（病棟・外来・地域連携室)、薬剤科クラーク

2. 1 年間の活動と今後の展望

今年度の外来患者満足度調査は、12 月 12 日 13 日の 2 日間で全ての外来患者様を対象として実施しました。回収率は、67.2%と昨年度と比較して減少しましたが、多くの患者様より意見を聴取することが出来ました。昨年度の調査で改善傾向を示しておりました待ち時間は、診察と会計が悪化していることを把握しました。待ち時間については、関係職員と調査結果を共有し、すぐに出来る対策から取り組んでまいりますが、次年度に待ち時間調査を実施し、その結果を基にした改善を図ることも計画しております。調査期間中は患者様方にご迷惑をおかけするかと存じますが、ご協力の程、よろしくお願いいたします。その他、2022 年度は、外来待合い室付近に設置している多目的トイレの自動ドア化や病棟ベランダの防鳥ネット設置など、患者様がご意見箱に投函していただいた問題を改善することが出来ました。ご意見箱や入院患者様全員を対象に実施している満足度調査を通じた激励やお叱りなど様々なご意見は、患者サービスに取り組む機会となっています。次年度は、今期 15.8%に留まった入院患者満足度調査の回収率向上を目標の 1 つに掲げて活動を計画しております。当院をご利用の入院患者様には、是非、退院時の満足度調査へのご協力をお願いいたします。私達は、これからも、お寄せいただいた多くの意見を参考に患者サービス向上に向けた取り組みを行ってまいります。

一昨年度よりサービス向上が中心となって取り組みを開始した Total Quality Management (TQM) 活動は、3 年目を迎え、8 サークルが様々なテーマで活動しました。更に、昨年度の最優秀賞サークルは、継続効果の検証としての発表を行い、TQM 活動の目標である継続的な改善活動の重要性を職員に伝えて頂きました。サービス向上委員会は、当院が地域の掛かりつけ医療機関として、患者様方から選ばれる病院であり続けることを目標に TQM 活動をサポートする役割を担い、今後も改善活動を推進して参ります。

（北野 晃祐）

NST 兼栄養管理委員会

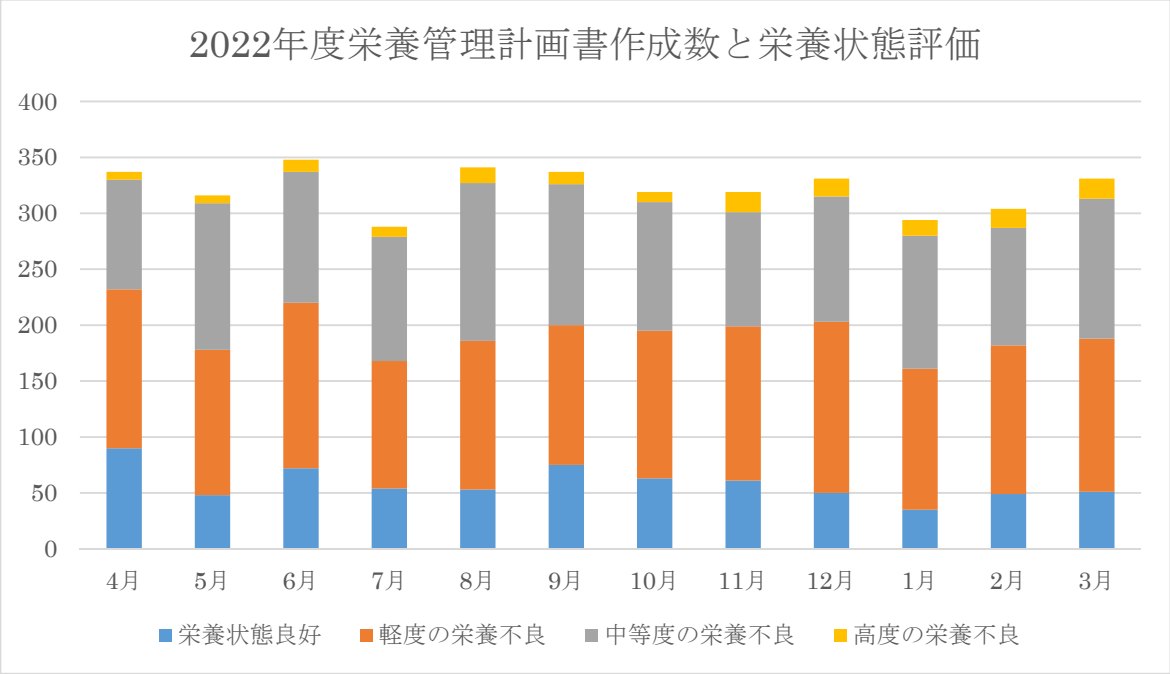
1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

医師 1 名、　管理栄養士 2 名、栄養士 1 名

看護師 5 名、言語療法士 1 名、薬剤師 1 名

2. 臨床実績



3. 1 年間の活動と今後の展望

活動内容：NST 回診及び検討会（毎週水曜日）

栄養管理委員会（第 2 水曜日）

NST（Nutrition Support Team：栄養サポートチーム）は、最適の栄養管理を提供する為に、他職種で構成された医療チームです。栄養管理は全ての疾患に共通する基本的な医療であり、NST の介入は複数の職種がお互いの知識を持ち寄り、チーム医療を行うことにより最善の治療につなげることが目的となります。

2022 年度は、それぞれの職種から、栄養管理委員会にて、栄養剤の種類や食事の介助方法、輸液の種類、糖尿病と食事の関連などの説明を行い、お互いの知識を深めることができた。病棟からの患者さんに関する経過報告や考察を通して、良かった点や改善点に関してチームで話し合うことができた。

急性期疾患に限らず、高齢者、嚥下障害、認知症、神経疾患、糖尿病、腎不全（人工透析を含む）、終末期などの様々な患者さんに対し、最適な栄養管理を行い、患者さん・ご家族の不安の軽減、症状緩和や褥瘡の発生を防止し、早期退院や社会復帰を助けることを目指していきたいと思います。

（柳田　育美）

褥瘡対策委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

〈回診メンバー〉

皮膚・排泄ケア認定看護師　1 名

褥瘡対策委員長　看護師 1 名

栄養管理士　1 名

理学療法士　1 名

褥瘡対策委員会メンバー：各部署主任　計 8 名

2. 臨床実績（2022 年 4 月～2023 年 3 月）

回診	第 1，3 木曜日　14：10 ～
褥瘡回診介入数	117 名
入院患者実数	2199 名
褥瘡院内発生数	41 名
院外からの持ち込み数	76 名
褥瘡発生率（全部署）	1.8644%
治癒数	37 名（完全治癒のみ　一部治癒数は含まず）
治癒率	31.62%

3. 1 年間の活動と今後の展望

2022 年度は前年度の褥瘡院内発生数 45 名/1965 名中から今年度 41 名/2199 名中であり院内発生数を減少させることが出来ました。皮膚・排泄ケア認定看護師とケアを行う中で、各部署の褥瘡対策への関心度が高まりケア方法の統一を図ることが出来た成果だと評価しました。治癒率は、入院中に完全治癒出来ないまま退院になった方の追跡は出来ていませんが、発見時の DESIGN-R2020 評価は d2～D3 へ移行する前がほとんどで早期にケア介入ができている事で治癒に繋がっていると思います。今後は退院先での褥瘡経過がどうなのか、ケアに困っている事はないか、などの情報共有が出来るような連携を図ることが次年度の目標と考えています。皮膚・排泄ケア認定看護師との協働は回診だけでなく、年 5 回の研修「人間力を高めよう」「スキンテア・DESIN-R2020」「お尻の周りのスキンケア　～看護の「進化」と「深化」を求めて～」「ドレッシングとは何か」「ストーマケア　創傷ケア」のテーマで、チーム力を強化する大切さやスキンケアの重要性を学びました。次年度は認定看護師から卒業し回診メンバーに形成医師を迎える事で壊死組織への積極的なアプローチと今まで学んだケアを継続し早期治癒と予防対策を目指していきたいと考えています。

（高田 真弓）

認知症ケアチーム

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

医師 1 名　看護師 9 名　薬剤師 1 名　作業療法士 1 名　MSW1 名

介護支援専門員 1 名　診療情報管理士 1 名

1 年間の活動と今後の展望

1）病棟巡回

医師、看護師、薬剤師、作業療法士が、月 2 回（第１、3 水曜日 14:30～15：30）依頼があった患者さんの所へ巡視にいっています。夜間せん妄、帰宅願望、昼夜逆転、大声を出すなどの BPSD に対して薬剤の調整、院内デイケアの促し今後の方針などを検討しました。せん妄回診ではタイムリーに病室訪問しスタッフへの助言を行いました。

2）研修の実施

認知症ケア研修コース（8 コース）を行い参加者 8 名終了しました。

認知症ケアに必要な知識を身につけサービスの質の向上に努めるという目的で講義、DVD 聴取、グループワークなどを行いました。また、施設見学として特別養護老人ホームマナハウスを見学し施設での認知症の対応を学ぶことが出来ました。

また、看護師 5 名が認知症研修に参加し、各項目に分かれ動画にて全職員への勉強会としました。視聴人数は 275 人で 67％でした。

3）院内デイケア

コロナ禍で今年度も午後のみの開催となりました。

4）今後の展望

今年度も認知症ケア研修コースを行い、職員の知識の向上に努めることが出来たため継続していき、研修内容も事例検討などを多く入れ実際の対応に役立つ研修にしていきたいと考えています。

コロナ禍で、家族の面会ができず不安感からせん妄や認知症が悪化する患者さんも多く対応に苦戦しました。感染防止に努めながら院内デイケアの継続、病棟巡回の充実を図っていきたいと思います。

（江口　敦美）

地域振興委員会

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

【構成メンバー】

放射線技師　1 名　　理学療法士　1 名　臨床検査技師　1 名　看護師　1 名

介護福祉士　1 名　　視能訓練士　1 名　ケアスタッフ　1 名　　総務　1 名

2. 1 年間の活動と今後の展望

病院 35 周年記念行事を契機として、「地域振興委員会」は継続した地域貢献活動を実施することを目的として 2018 年 7 月に発足いたしました。2022 年 7 月で当院の 40 周年、サ高住かりん 10 周年目を迎えるにあたり、病院 40 周年・サ高住 10 周年記念行事を企画、運用する運びとなりました。地域振興委員会を中心に記念行事運営チームを立ち上げました。

日頃からお世話になっている、地域住民の方々に感謝の気持ちを込めて、みんなが楽しんでいただけるような祭りを開催いたしました。やはり、お祭りと言えば出店ということで、壱岐・野方商店連合会の方々にも協力してもらい、飲食の販売をしてもらいました。また、職員の協力のもと子供たちが楽しめるよう、射的やスーパーボールすくい、かたぬきなどの模擬出店を開きました。そして、祭りの目玉として、トラックステージによるダンスや吹奏楽部の演奏などを地域住民の方々や地域の中学生などに出演してもらいました。吹奏楽部の迫力のある重低音や、軽快な音楽に合わせてのリズミカルなダンス、地域のおじさま達が結成したバンドの演奏も懐かしいナンバーで心が癒されました。どの、出演者も一生懸命、練習し本番に臨んでくれている様子が見て取れて、どなたもステージ上で輝いていました。舞台袖で見ていた私は、感動で泣きそうになるのこらえるのがやっとでした。最後には、お楽しみ抽選会と題して、豪華な賞品があたるくじ引きをステージ上で行い、大変盛り上がりました。地域の方々のお力添えがあってこその今回の成功につながったと思います。本当に感謝しています。

今後は、当院をもっとアピールできるようなイベントを開催して、当院の認知度を高めたいと思っています。そして、地域にとって安心して頼れる病院となれるように、地域活動を行っていきたいと思います。

（塚園　慎也）

サービス付き高齢者向け住宅かりん

（訪問介護事業所かりん、通所介護事業所かりん）

使命：高齢者の方々が世代を超えて地域の人々や子供達と共に暮らしていける社会・
　　最期まで地域社会の一員として誇らしく暮らしていける街作りをしていきます。
理念：入居者に最期まで誇らしく、そして安心できるくらしの提供をしていきます。

1. スタッフ紹介（2023 年 3 月 31 日現在）

施設長（看護師） 1 名　　事務 1 名
訪問介護：サ責（看護師）1 名　介護福祉 12 名　ヘルパー 2 名　看護師 1 名
　　准看護師 2 名
通所介護：主任（介護福祉士） 1 名　介護福祉 3 名　看護師 1 名　准看護師 1 名
　　ヘルパー1 名　無資格 1.6 名

2. 実 績

＜入居者状況＞　平均年齢：88.5 歳　平均介護度：3.1
＜新入居者＞　21 名　紹介元　病院関連：12 名　外部ケアマネ：3 名　家族：5 名
　　本人 1 名）
＜退居者＞　21 名　別施設：4 名　自宅：1 名　長期入院：2 名
　　死亡：14 名（施設看取り 13 名）

	サ高住	通所介護
	入居率(%)	のべ利用者数
4 月	95.1	617 名
5 月	91.2	568 名
6 月	97.3	671 名
7 月	97.7	622 名
8 月	92.3	578 名
9 月	97.8	593 名
10 月	94.7	653 名
11 月	97.6	646 名
12 月	96.1	722 名
1 月	92.5	670 名
2 月	95.2	653 名
3 月	99	773 名
平均	95.5	647 名

3. 1 年間の活動と今後の展望

8 月 1 日に創設 10 周年を迎えることが出来ました。これもひとえに近隣関係者の皆様のおかげと御礼申し上げます。それを記念して 11 月 5 日に約 40 名の関係各所をお招きし記念式典を執り行いました。

今年度の目標と達成度

1）サービス付き高齢者向け住宅　かりん

目標

①**安定した経営**：目標額 1,755 万円 収益月平均 1,900 万円（108.2%）目標達成

②**職員が各自目標を掲げ、人材育成をしていく**(志高一心):喀痰吸引資格取得１名、現在資格取得研修中１名・実習指導士取得３名
今年度施設初ネパール国籍のスタッフを採用し、研修を行いながら育成を行った。
文化、風習の違いや言葉の問題は有りお互い戸惑う事もあったが、その都度コミュニケーションを図り時間をかけ共通理解を得るようにしていった。今では職場にも馴染み退職なく勤務継続できている。

③**理念を大切に成長・挑戦し続ける企業**
理美容料金にカンボジア孤児への寄付を含んだ業者を採用し収益の一部を寄付、またトルコ・シリア大地震災害への寄付金を集め送金を行った。今後も継続して行っていく。

２）訪問介護事業所　かりん
＜コンセプト＞　自立に向けた１ケア・１リハビリ・１ギフト
目標
①**利用者本位の参加型介護過程が展開できる：**入居時に受け持ちスタッフが本人の意向を確認し基礎情報・計画立案しスタッフ皆で共有している。
まだ介護過程の展開は完全ではないが、少しづつ意識的に行えるようになってきている。
②**介護を丁寧に皆が同じレベルで出来る様になる：**口腔ケアを中心にレベルの統一を図ろうとしたが、十分ではなかった。ただ誤嚥性肺炎を起こす方がほぼいなかったことは評価できると思われる。

３）通所介護事業所かりん
＜コンセプト＞　心・体・頭を元気にする
目標
①**利用者参加型の園芸・おやつ作り・外出等を行う：**　コロナ禍で外出が十分できなかったが、10 月コスモス見学・外食、2 月節分で飯盛神社参拝を実施できた。久しぶりの外出を皆さんとても喜んであった。1 回/月は利用者と共におやつ作りを行い美味しく食べることが出来た。少人数ではあったが、園芸活動でトマト・ピーマン・きゅうり作りを行い収穫して新鮮な野菜を堪能出来た。
②**くもん学習療法を認知予防の一環として実施**
③**学習指導士育成・学習療法利用者を増やす：**くもん学習指導士育成を 2 名行った。くもん学習者は 20 名を目標としていたが 65%の達成率であった。

＜事例発表　よつばの会にて＞
令和５年３月５日
チームによるご本人の豊かな社会生活への取り組み
発表者　弥山　亮太
今後も地域社会に貢献するという使命を継承しながら入居者さんが安心して楽しく心地よく生活できる場の提供を行うと共に、職員一人一人のワークライフ・バランスを推進していく。
（坪山　由香）

業　績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名　称
地域包括ケアの遷移と今：地域の中での病院のありかた	菊池　仁志	2022 年 2 月 18 日	福岡	第 22 回 病院の経営の質向上研究会
脳神経内科				
パーキンソン病・パーキンソン症候群	山田　猛	2022 年 1 月 27 日	WEB	糸島市地域包括支援センター研修会
認知症にならないために	山田　猛	2022 年 7 月 27 日	壱岐南公民館	おっしょ医くん講座
パーキンソン病の診断と治療	山田　猛	2022 年 9 月 28 日	WEB	パーキンソン病多職種連携の会 in 福岡
健康増進・糖尿病センター				
劇症 1 型糖尿病を発症した、非糖尿病性末期腎不全で維持透析中の 64 歳の 1 例	柳田育美、両林龍太朗、野中瑠以子、小野順子、吉田亮子	2022 年 10 月 7 日	福岡	第 60 回 日本糖尿病学会九州地方会
高齢糖尿病者の認知機能と DASC－21 の有用性についての検討	柴田さおり、藤川太一、山口良樹、小野順子、吉田亮子	2022 年 10 月 7 日	福岡	第 60 回 日本糖尿病学会九州地方会
糖尿病患者さんの生活支援を考える～より良いサポートを目指して～	横尾　沙織	2022 年 6 月 8 日	WEB	糖尿病多職種連携セミナー
劇症 1 型糖尿病を発症したと思われる非糖尿病性末期腎不全で維持透析中の症例	柳田育美、両林龍太朗、野中瑠以子、小野順子、吉田亮子	2022 年 9 月 20 日	WEB	第 527 回 福岡市糖尿病アーベント
当院内における院内連携の状況	吉田　亮子	2022 年 11 月 24 日	WEB	Stop CKD in 福岡エリア
デベルザ研修会	吉田　亮子	2023 年 1 月 17 日	福岡	デベルザ研修会
当院での糖尿病治療状況 SGLT2 阻害薬	吉田　亮子	2023 年 2 月 10 日	福岡	福岡西エリアの女性医師の会

業　績

学会・研究会発表・講演等

演題名	発表者・共同演者	年月日	開催地	名　称
リハビリテーション科				
多系統萎縮症における構音・嚥下障害の経時的変化と言語聴覚療法の効果	木村　一喜	2022 年 7 月	東京	第 16 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス
診断早期の筋萎縮性側索硬化症患者に対する発声・発語器官のリハビリテーションの効果	木村　一喜	2022 年 9 月	東京	日本神経摂食嚥下・栄養学会
高齢糖尿病者の認知機能と DASC-21 の有用性についての検討	柴田　さおり	2022 年 10 月	福岡	日本糖尿病学会九州地方会
せん妄を呈したパーキンソン病患者 1 例に対する生活リハビリテーションとリアリティオリエンテーションの効果	亀山　莞汰	2022 年 11 月	東京	第 10 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
重度パーキンソン病患者の嚥下障害に対する完全側臥位法が嚥下動作に与える影響	齋藤　正直	2022 年 11 月	東京	第 10 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
誤嚥性肺炎発症後のパーキンソン病及び関連疾患患者に対する嚥下評価・訓練の有効性	木村　一喜	2022 年 11 月	東京	第 10 回 日本難病医療ネットワーク学会学術集会
周辺症状（BPSD）を呈したアルツハイマー型認知症に対する生活リハビリテーションの有効性	森山　未来	2023 年 3 月	長崎	第 10 回　慢性期リハビリテーション学会

サービス向上委員会

2022 年度 TQM 活動発表大会結果

賞	サークル名	部署	活動テーマ
最優秀賞	Good bye Over time!（新 2 階北病棟）	新 2 階北病棟	記録業務を見直し、時間外削減に努める
最優秀賞	無事故戦隊　ムジコーズ（デイケア）	デイケア	事故を無くし、利用者を守る
優秀賞	ダンシャリアン（放射線科）	放射線科	造影剤のコスト削減

2022 年度　村上華林堂病院年報
発　　行：2023 年 8 月
編　　集：病院年報編集委員会
委 員 長：司城博志
委　　員：江口敦美
：北野晃祐
：久間伸彦
：西島勝也
：宮原美佐